

# 秋の章

## 第1章

佐木次郎

1

関、久しぶりだな。萩村だ。俺のことを覚えてるか。

お前に手紙を書くのもあの日以来だ。あれからもう三十年になるだろうか。そう思えば、不意に俺はひどく驚かされる思いがする。歳月というものは人が気付かぬうちにいつの間にか過ぎていくものだ。そういえば近頃は俺も髪に白いものがちらほらしてきた。顔もそれなりに年齢を刻んでいるようだ。お前もそうだろうか。だが、こうして手紙を書きながら俺の心に浮かんでくるのは、あの日のお前、まだ大学生だったあの日のお前の姿ばかりだ。あの頃の俺たちは、お互いに確かにまだ、青春の中にいたな。

前置きが長くなった。実は、姉の美佐子が、先日他界した。癌だった。もともと身体の不調をあ

桐の葉も踏みわけがたくなりけり

かならず人を待つとなけれど

——式子内親王

まり口にする人ではなかったが、ようよう重い腰を上げて病院に行ったときにはすでに手遅れだった。それでもしばらくは快復を目指して病院で闘病を続けていたが、もう見込みがないと医者に告げられたあと、本人がそれを強く望んだので、医者とも相談の上俺はその希望を容れて姉を家に戻すことにした。お前も一度来たことがあったあの修善寺の家だ。祖父の死後、姉に唯一残されたのがあの家だったのだ。そこで姉はずっと一人で暮らしていた。その家に姉は強く帰りがつたし、俺も静養のためには静かなあの家で過ごさせてあげるのがいいと思つた。だから俺は、看病のために家族とともにそこに居を移したのだが、結局それは長い看病にはならなかった。俺がそこに移ってから一箇月も経たずに姉は息を引き取つたのだ。それは本当に眠るような静かな死であつた。

いや、お前にとつては、このような話はもう関係がないことだろう。長い年月ずっと交流を絶つていた人間から突然このような手紙を受け取つて、お前はさぞかし困惑していることかもしれない

い。無論、そのようにお前を困惑させるのは俺の本意ではない。一度関係が途切れたなら、途切れたままにしておくのがいいと、俺も何度もそう思つた。だがそう思うたびに、その一方で俺はこうも思つたのだ。このままお前に何も知らせずにおくのは、それはそれでお前に対し不義理となるのではないか。いや、不義理というよりも、それは俺の中に今もある、かろうじてお前へと繋がっている細い一本の糸を、最終的に完全に断ち切るということの意味してはいまいか、それはそういうことなのではないか。なぜか俺にはそのような気がしてならず、そういう相反する二つの思いが俺の胸裏を入れ違いに何度も掠め、そのたびに俺は、手紙を書いては破り、破つては書き始め、その繰り返りで、実を言えばこれは七度目の手紙になる。まったくもつて度を越した優柔不断と言ふべきか。どうにも俺の中には、今もまだお前に対する複雑なものが消えずに残り続けているらしい。こう書いたところでお前には何のことかは分かりはすまいが。いや、俺は一体何を書いているのだろう。少し混乱している。こうしてお前に

手紙を書いていると、知らず知らず俺の中には言葉にならないさまじまなものが奔流のように溢れてきて、どうにも文がまとまらずに困る。

ともかく、姉が死んだことを俺はお前には知らせておきたかった。そして、もし俺の我儘を聞いてもらえるなら、こちらに訪ねてきてほしいと伝えたかったのだ。今俺は、久しぶりにお前と話をしてみたい気持ち強いのだ。それがお前にとって迷惑なことだと思うなら、この手紙はその場で破り捨ててかまわない。学生時代の知人からわけのわからない手紙が送られて来たくらいに思っただけで軽く無視しておいてくれ。だがもし俺の希望を叶えてくれるなら、次の番号へ電話をほしい。そのときには、息子を迎えに向かわせる。

それは便せん三枚にも満たないごく短い手紙であった。

物を書くのが飯より好きだったこの男の昔の姿を知る身としては、それはずいぶん短くまた拙い文面だとも感じられたが、それゆえにこそ、同時にその手紙の裏に揺れている彼の想い、その

抱えている何かしらの葛藤が、そこから強く感じられてくるような気も、明彦にはした。

テーブルに置いた空封筒を指先でつまみ上げて改めて見てみる。白のおもてにブルーブラックの万年筆で「関明彦様」と書かれたそれは、いかにも達筆で、見ていると自然と懐かしさが込み上げてくる。裏を返せば、住所とともに「萩村静也」と綴られた、これも端正な彼の文字がそこに。その習字の手本のような懐かしい文字を眺めているうちに、その文字の向こうに明彦は、あの夏の日のこと――例えればそれは、あの日のあの邸（やしき）の、木陰の中に見たその落ち着いたたはずまいであったり、夏盛りの烈日を浴びた庭の木々の輝きであったり、辺りに響いていた蝉の声であったり、汗を吸ったシャツの匂いであったり、かと思えば、それは涼しい夜の縁側で、食べた西瓜の汁の指に流れた感覚や、ほのかに漂っていた蚊取り線香の淡い匂い、庭先に迷い込んだ蛍の光夜空に走っていた銀河とそれから無数の星々、遠近（おちこち）の虫の声、そこに自分がいて、萩村がいて、そして彼の姉が、そこで静かに微笑し

ていて——それら彼にとつて美しく同時にほろ苦い思い出の数々が、薄衣を透かして見るように、ほのかに見えてくるような気がした。

この店の店主の粋な計らいで、店内の各テーブルの上にはそれぞれに微妙に形の違うガラス製の小さな一輪挿しが一つずつ置かれていて、その各々には楓のひと枝が可憐に添えられその葉の色づきで店の中にもさりげなく季節を呼びひれてくれている。今はもう十一月も終わりに差し掛かっていて。あの烈日もあの蝉時雨も、あの日をおわせてくれるような夏の気配はもうどこにも残されていなかったが、ただ一つ、そのひと枝の楓に、明彦は思い出の名残りを見つけるような思いがした。あの邸の庭には無数の楓が植えられていたこと、そしてそれらが夏の日射しを浴びて眩しい緑に輝いていたことなどが、おのずから思い出されてくるのである。それとともに、その楓の木の下で聞いた萩村の姉美佐子の、あの凜とした声が、明彦の耳には蘇ってきた。

「秋になれば、本当にきれいに色づくのですよ」  
店の窓から外を見てみる。その古風（クラシカ

ル）な喫茶店は道路を挟んで都市公園の向かいに建っていたので、公園内の無数の樹木の森のような重なりがそこからはよく眺められた。秋が深まるにつれて櫛も銀杏もいっそうその葉の色を濃くしていたが、それらが夕日を浴びて燃えるような紅に染まつている。風は日ごとに寒さを増して、通りを歩く人々もずいぶんと厚着が目立つようになってきた。枯れ葉が流れやがてどこかへ去っていく。見ているうちに何かしんみりしたものが胸の底に降りてくるのは、窓の外に色濃く漂う秋の気配のせいだけではなかった。それは店の中に流れているピアノの調べのせいでもあった。

店内はあえて照明を弱くしていて、その微妙な明るさの中にやや暗い色合いのアンティーク調のテーブルや椅子を配置した様子は、なかなか風情のあるものだった。店の奥にはレトロな家具の姿もいくつか見えて、そのさらに奥には木目調のアップライトピアノが壁に張り付くように置かれていた。時によれば音大出の店主の妻がそのピアノで自ら弾いてくれることもあるとのことだが、今店に流れている音楽はCDからのもの

だった。その哀調を濃く帯びたメロディに、向かいに座った姪の葉月が鼻歌を合わせているのに気づき、

「なんて曲なんだ？」

と明彦は、なんとなく聞いてみた。

「秋のささやき。クレードルマンの」

そう言っ、明彦が手紙を読んでいた間頰杖をつけて横の方を見ていた葉月は、目だけを叔父に向け、気に入った？と聞き返した。

「生憎と音楽の良し悪しは俺には分からん。だが、きれいな曲だな」

「私も好き。秋っぽくて」

そうか、と言いながら、明彦は手紙を畳んで封筒に戻した。それからそれを背広の内ポケットに仕舞ってから、

「この店もいいな」

と、ようやくコーヒーに口をつけた。コーヒーはすっかり冷めていたが、それでも愉しめるだけの香りはまだ残っていた。

「でしょ？私のお勧め。友達に教えてもらったの」  
「友達って、高校の漫研の？」

「違う！漫研じゃなくて歴研。歴史研究会。何度言えばいいのよ」

「だって、部活で漫画描いてるって、前に言っってなかったか？」

「歴史を題材に漫画を描いてるなら漫研だけど、私達は漫画を媒体に歴史を描いているの。だから歴研。いい加減に分かってよ」

その理屈は明彦にはぜんぜん分からなかった。明彦のスマートフォンに兄の壮一から電話がかかってきたのは昨日のことだった。萩村静也という人物からの明彦宛の手紙が壮一の家が届いたので、明日娘の葉月に届けさせるというのである。明彦にとっ、それは三十年ぶりに聞く友の名だった。それを聞いたとき、思わず兄にもう一度その名前を確認せずにはいられなかったほど明彦は驚いたが、その手紙が兄のところへ届いた理由については、すぐに察しがついた。明彦は大学時代は家から大学に通っていた。大学までは電車で一時間ほどの距離であり、十分通える近さだったのである。きつと萩村は、その頃に教えてあった住所にそのまま手紙を送ってきたのだら

う。

萩村とは、明彦はアルバイト先で知り合ったのだった。大学に入って間もない頃のことであった。アルバイトは釣りの具の量販店の商品陳列や販売を内容としたもので、互いに溪流釣りを趣味としていたこともあつて話が合った。話してみても初めて二人は同じ大学に通つていたことを知つたのだが、キャンパスは広大で、工学部応用化学科の明彦と文学部人文科の萩村では畑がまるで違つたので、あまり学校で顔を合わせる機会はなかつた。

その頃の萩村は、少しやせ気味で、神経質そんな目をした、しかし鼻筋や口元にはどこか上品さを感じさせる、貴公子然とした雰囲気を漂わせた青年だった。生まれは京都で、そのため話す言葉には僅かに京風のアクセントが混ざつていたが、それが却つて彼のその貴公子的雰囲気を強めるのに役立つていたようで、そのせいなのか学内での彼の女性人気はかなり高かつた。成績はいつも優秀で、そういうところも人気の一因となつていたが、スポーツの方は苦手にしていて。萩村は少し足を悪くして、常に左足を僅かに引きずる

ように歩いていて。子供の頃に交通事故があつて、その名残だということであつた。その事故で両親を失つたということは、後にずつと親しくなつてから明彦が聞かされたことであつた。

そんな萩村との親交も、しかし今から振り返れば、三年にも満たない短い期間であつたことに、明彦は今更ながら驚かされるような気がした。それほど、萩村との思い出は、今も彼の中に鮮明だった。

——あの年、夏休みが終わつた後も、萩村が明彦の前に姿を見せることはなかつた。

彼が京都の大学に転学したことは、後に彼からの手紙が届いて知つた。その後明彦自身も日本を離れることになり、互いの関係は、以来今日まで、それを境に完全に途切れていた。

2

明彦が日本を離れたのは、アメリカの大学に留学するためだった。彼の書いた六価クロムの分子構造をテーマにした論文が評価され、教授の推薦

を受けることができたのである。その後留学先の大学で博士号（ドクター）を取得してからそのまゝ十数年を国外で過ごした彼は、帰国後は九州の国立大学にポストの空きがあったのでそこに准教授としておさまった。そして、七年前に東京のS大学が環境科学部を新設するというので、その分野の第一人者として招かれ久しぶりに東京に戻ってくることになったのだが、その頃はすでに両親は他界しており、実家は兄が継いでいたので大学の近くにマンションを買い今はそこに一人で暮らしている。そこは兄の家から私鉄の駅を三つばかり過ぎた場所にあった。

葉月の通う高校は、S大の付属高校で、大学に隣接していた。なので、壮一は弟に届け物など電話で済まない用事があるときにはいつも葉月を使つた。葉月の方も昔からこの叔父には懐いていたので、父親にそう言いつけられても嫌な顔をしたことはなかったが、その際にお小遣いをねだることも忘れたことはなかった。

その日学校が終わってから葉月が明彦の研究室に行くと、こうして何度も顔を見せているので

すでに彼女を見知っていた学生の一人が、

「先生？」

と聞いてきた。

「ええ。でも、なんか忙しそうですね」

そこにはいつになく人の動きがあつて、案の定、葉月の訪れを知らせにいった学生が、戻ってきて、今手が離せないから少し待つてるやうにとの明彦の言葉を葉月に伝えた。葉月は学生に店の名前と地図を書いたメモを渡し、そこで待つてると叔父に伝えてくれるやうに頼んだ。それが、今こうしてピアノのメロディが流れているこの店、「喫茶 四季」であつた。

「ところで、何が書いてあつたの？」

と葉月が尋ねた。うん？と明彦は少し首を傾げて葉月を見た。

「手紙」

「なぜそんなことを聞く」

「すぐ真剣に読んでた。それも長い時間」

「そうか？」

と苦笑してから、明彦は一輪挿しの紅葉になんとなく目をやった。

「昔の知人が、亡くなつたんだそうだ」

「昔の、恋人？」

「ばか」

「そんな顔してた」

「どんな顔だ」

「なんとなく、今にも泣きそうな。それでいて、なんだか懐かしそうな」

「漫画の読み過ぎだ」

と、明彦は無造作に手紙を取り出し、葉月の前に突き出した。

「いいよ、他人の手紙を読む趣味ないし」

と慌てて手を振る葉月に、明彦は手紙を葉月の前でひらひらさせながら、

「大したことは書いてない。訪ねてくれて書いてあるだけだ」

葉月はおそるおそる、といった様子で手紙を受け取り、少し躊躇してから、それをそのまま叔父に返した。べつに無理強いすることではないので、明彦は黙ってそれを受け取りまた内ポケットに戻した。曲が終わって次の曲がかかった。ノスタルジーという曲だと葉月が教えた。

「それで、叔父さんは行くの？」

と葉月が聞いた。なにが？と明彦は聞き返した。「だから、伊豆の修善寺。その人、そこに住んでるんでしょ？住所にそうあった」

「まあ、そのつもりだ。何はともあれ、昔の友達からの手紙は、嬉しいものだからな」

それを聞かや、葉月はなぜか、やった、というような顔をして、

「私も付いてっていい？」

と妙なことを言いだした。

「——なにが？」

「だから、修善寺に」

「なんでお前が付いてくるんだ」

「いいじゃない。滅るものじゃなし」

「そういう問題じゃないだろ」

——修善寺は、以前から葉月が一度行つてみたいと思つていたところだというのであった。

葉月は父親の影響からか小さい頃から時代劇ばかりを好んで観るような子であったが、そのせいもあってか中学に入ると歴史研究にのめり込むようになった。時代小説は言うに及ばず、中学



生には難しく思えるような専門書から、果ては、無論本物ではないが古文書のようなものまでが漫画に混ざっていつの間にか葉月の部屋の本棚に見かけるようになった。もつとも、好みについては少々移り気なところもあり、以前は坂本龍馬に岡惚れしていたようであったが、今は別の人物に関心が移っているようだった。

「源頼家？」

「うん。鎌倉幕府の二代将軍。考察すればするほど、この人すごく面白いのよ。もしシェークスピアがこの時代の日本を知ってたら、絶対頼家さんを題材に悲劇を書いてたと思うわ」

「その無茶な例えはともかく、それと修善寺となんの関係があるんだ」

「え？」

と、一瞬ぼかんとしてから、葉月は少し考え込むように額に指を添え、

「あの、まさかとは思うんだけど、もしかして、それ、真面目に聞いている？」

「だって、鎌倉の將軍なら、地元は鎌倉だろ」

その答えを聞いて、葉月は思いつき頭を抱え

ながら、

「だめだ。やはりこの男の頭の中には化学式しか入っていない」

「お前、それかなり失礼だぞ」

葉月が説明するには、修善寺は源頼家の終焉の地だというのであった。

叔父のそのとぼけた答えは、葉月の何かに火をつけてしまったようだった。こうなったら無知な叔父さんに全部話してあげると、葉月は源頼家の生誕から暗殺されるまでを、まるでそれをこの叔父に教えるのは自分の使命だとしても言わんばかりの勢いで、一気に語り始めた。

頼家が生まれたのは寿永元年——と言っても叔父さんには分らないよね、と言って、葉月が西暦で言い直したところでは、1182年。頼朝が鎌倉を手に入れ、これを攻めに来た平家の軍勢をも富士川の戦いで破ってからすでに二年近くが経っており、鎌倉も比較的落ち着いていたころであった。はじめは源氏の御曹司として大切にされてきた頼家であったが、1199年に頼朝が死ぬと、そこからはまるで——葉月の表現では——

地獄の釜が蓋を開けたかのように鎌倉は血で血を洗う抗争の坩堝（るつぼ）と化していった。ま  
ず殺されたのが幕府の功臣、梶原景時という人物  
で、葉月によればこの謀殺まがいのいきさつを見  
るだけでも当時の乱脈ぶりがよく分かるのだと  
いう。吾妻鏡などによればこの事件の発端は頼家  
自身の仕出かしたことにあったとなっており、そ  
の経緯はこういうものだった。三河の国で室平重  
広という人物が非道を働いているという訴えが  
鎌倉にあったので頼家は安達景盛という武士を  
討つ手に差し向けたのだが、その留守に景盛の愛  
妾を奪い取ってしまった。このことで景盛が頼家  
に恨みを抱いていると讒訴する者があり、頼家は  
景盛を討ち取ろうとしたが、母親の北条政子に諫  
められて思いとどまった。ところがこの事を知っ  
た結城朝光という武士が、頼朝逝去のときに自分  
も出家すべきであったと頼家への非難とも取れ  
る嘆きを漏らしたのを梶原景時が聞き、それを頼  
家に密告した。これを聞いた頼家は朝光を討とう  
としたが、朝光は親交のあった三浦義村をはじめ  
とする他の有力武将と結び、逆に頼家に景時を討

つよう迫った。この結果として梶原景時の方が殺  
されることになったのだった。

これを始まりとして、幕府内の抗争はその後  
次々に起こることになった。そのあと頼家の叔父  
の阿野全成が謀反により討たれたかと思うと、次  
には頼家の舅でありその最大の後ろ盾であった  
比企能員（よしかず）が北条氏に謀殺され、やが  
て比企一族そのものが幕府軍により滅ぼされる  
と、その時点で頼家と北条氏との亀裂は決定的な  
ものとなった。そのとき頼家自身は重い病気にか  
かっていたのだが、病床にあるうちに比企一族が  
滅亡し、その戦火の中で嫡男の一番までが殺され  
たと知り、ついに頼家は北条一族の討伐を決断し  
た。しかしこれを事前に知った北条氏の手によつ  
て逆に囚われ、伊豆修善寺に流された後、そこで  
暗殺されたというのであった。

葉月が語ったその頼家の物語は、悲劇というよ  
りかは、もつと荒々しい、何か野獣同士のいがみ  
合いのようなイメージで明彦には聞こえた。その  
人物が辿った末路も、哀れと言えば哀れだが、別  
にどちらが悪いというのでもなく、一方の野獣が

もう片方の野獣の牙に斃(たお)れたに過ぎないという風にも感じられ、そのような人物になぜ葉月が惹かれるのが明彦には不思議だったが、それを葉月に聞くと、彼女は待ち構えていたように、「だってさ、吾妻鏡にしたって北条九代記にしたって、成立にはどうしたって北条氏の影響を受けてるんだもの。都合の悪いことは記録に残さないだろうし、それを前提に考えると、そこに書かれている頼家さんの悪行だって差し引いて考えるべきなんじゃないかなって思うのよ。例えば土地争いの裁定で地図の上に適当に線を引いて決着させたなんて話が伝わってるけど、彼、鎌倉生まれの鎌倉育ちよ。一所懸命なんて言葉があるくらい東国の武士にとって土地がどれほど大切なものか、そんなの知らないはずないじゃない。でもね、ここが史書の面白いところでね、そういう捏造が逆に裏側に隠れた真実をほのめかしてくれることもあるのよ。ここから見えてくるのって、なんだか分かる？ 分かんない？ そうだよね、叔父さんだもの。例えば三代目の実朝さんについては吾妻鏡もそんなに悪くは書いてない。多少文弱だ

と非難しているところはあるけど、頼家さんみたく悪しざまには書かれてないわ。つまりね、源頼家という人物は北条氏にとってそれだけ都合の悪い人物だったってこと。もつと分かりやすく言えば、次第に幕府の中で独裁色を強めてくる北条氏に対して、頼家さんは最後までその専横に抵抗しようとした人なんじゃないかって思うのよ。今から見れば幕府って源頼朝が征夷大將軍になつてすぐに成立したみたいに見えるけど、当時はそんな簡単なものじゃなかったと思うわ。最初は平家に対して、東国の武士団がどうにかそれに対抗しようとするのを寄せ合ってきたのがそもそも鎌倉幕府なんだし。まだまだ力が弱かった頃は皆で団結しなければすぐに滅ぼされてしまうっていう恐怖心があったから団結できていたけど、それが大きな力を得るにつれて、外に向かっていた敵意が次第に内に向かうようになるのは、むしろ必然なのよ。だって鎌倉武士って一族の一つ一つが仲間であると同時にライバルみたいな関係だったんだから。頼朝さんが生きているうちはまだ抑えが利いた。だけどその重しがなくなつたあ

とには殺すか殺されるかという東国武士の危ない習性が一気に噴き出すことになった。そういう危ういマグマのような上に立って、足下に奈落を見ながら、それでも戦うことをやめなかったのが頼家さん。それは北条一族の専横に対してだったのかもしれないし、もしかしたらもっと大きな人の手ではどうにもならない歴史の流れというのに対してだったのかもしれない。それでも何かと必死に戦い、そして敗れ去っていったのが、私は源頼家という人物だったと思うの。吾妻鏡が彼のことをあそこまで悪く書くのも、それだけ彼が鎌倉の御家人たち、中でもそのトップの北条一族に危険視されてた人物だったということのそこはかとない裏付けなんじゃないかな。そうそう、彼の最後についてはね、北条方の資料だけじゃなくて、慈円というお坊さんも書いているわ。この慈円という人は元をただせば関白藤原忠通の子供だし、北条氏に氣を使う必要もないからこっちの記述の方は信頼できるんじゃないかしら。その記録、愚管抄っていうんだけど、そこにはこんな風に書かれているの。えと、適当に現代語にすると、元

久元年——つまり1204年ね、七月十八日に修禪寺にて頼家入道を刺し殺したようだ。すぐに取り押さえることができなかったので、頸に紐をつけ、ふぐり、つまり、男の人の、あれ？それを掴むなどして殺したと私は聞いた。——ほんと、壮絶な場面が目に見えようだわ」

よく知っているものと、葉月の話を明彦はそのよく動く口の辺りを眺めながら感心して聞いていたが、ふと話が慈円のことに触れたとき、心の中にふっと萩村の姿が浮かんできた。一体、関家の流れというその僧侶は、その陰惨な事件をどのような気持ちで聞いたのだろうか。そう思ったとき、昔萩村が語った言葉が不意に蘇ってきたのである。

「京の貴族にしてみれば、もともと血の一滴さえが穢れを孕んで忌むべきものだったはずだ。それが一歩外へ出ればあちこちに夥しい血がどばどば流れる。保元から寿永、治承の乱までの時代を生きた貴族にとって、現実世界はそういう凄惨で穢れ切った場所と見えていただろう。そういう世界の中に置かれ、それでも歌を詠まなければな

らないとしたなら、歌人達はどうにか言語の力で現実を超えていかなければならなかった。新古今時代の歌が今日（こんにち）その観念性、非現実性の特徴の一つとしていられると言われているのも、そういったことが背景にあるわけだ。つまり、時代の狂暴性があの芳醇な新古今の歌風を準備したのだと思えば、「面白いとは思わないか」

「あれは、どういうきつかけで萩村からそういう話が出たのだったか……」

「なあ葉月、新古今和歌集って、できたのその頃か？」

と、なんとなく聞きたくなつて、明彦は葉月に聞いてみた。不意に聞かれて、葉月は「え？」と、少し首をかしげ、それから何か意味ありげな顔をしてから、こう答えた。

「そうね。確か一応の成立を見たのは元久二年。つまり、頼家さんが殺された翌年のこと。まさにその頃よ」

「なるほどな。面白いものだな」

「……………」

明彦が何に納得しているのかについて、葉月は

特に聞いてはこなかった。ただ、何か言いたげに上目遣いでじつと叔父を見つめてから、気負うように一つ咳払いをすると、唐突に妙なことを語り始めた。

「えーと。——平安末から鎌倉期にかけての動乱は、まことこの時代に深化を遂げた末法思想に合致していた。この時代の歌人達は、この世を夢まぼろしの如きものとして後世に多くの秀歌を残したが、それは彼らが混迷を深める外部世界に背を向けて歌の世界に閉じこもった結果ではなく、むしろ時代の混迷が彼らの無常観を徹底的に純化させていった結果なのである。やがて平家が滅び、源平の争乱は終息を見たが、そうして訪れた平和の薄皮一枚下に地獄が広がっているということ、保元の頃より繰り返されてきた血腥い争乱を目の当たりにしてきた人々の目には明らかであったであろう。美と洗練に至上の価値を置く王朝人達にとって、すでに現実世界に彼らが歌の拠り所とする美しきものを見出すのは困難であった。そういうものを基底として、今日新古今調と呼ばれるところのあの観念色の濃い歌が生

じたのである。この典雅にして妖艶、哀傷にして夢幻の趣を持つ空前絶後の歌集がこの時代に成ったのは、それゆえ決して偶然ではなかったのである——」

それは数年前に萩村が著した著作の一節だった。はじめ明彦は、一体葉月は何を言っているのかと不審に思っていたが、それと気づくと、それを空で暗唱している葉月に驚いた。確かそれは後鳥羽上皇の伝記と歌の解説の中間のような内容の本で、文章はそれのあとがきに書かれていたものだったはずだ。普段はその手の本はほとんど手にすることのない明彦だったが、以前書店で偶然に萩村静也の名を目にして、懐かしさから手に取ってみたのであった。何でもどこかの新聞社の賞を取ったとかで、目立つところに置かれていたから明彦も気づくことができたのだが、そのあとで一通りは読んだはずだが内容がどういうものであったかはすでに忘れてしまっていた。しかし葉月が暗唱するのを聞いて、確かにあの本の中にそういう文章があったことははっきりと思ひ出すことができた。

「お前、すごいな。全部覚えてるのか」

「まさか。いくら私が頭よくても、さすがにそこまでじゃないわよ」

「いや、決してよくないだろ、学校の成績とかは。いつも兄貴がこぼしてるぞ」

「うっさい！——手紙の差出人の萩村静也さんって、どつかで聞いた名前だなんて思ってた、前に友達に教えてもらって読んだことあったの思い出したの。昨日あとがきだけでもう一回読み返してみても、今のはたまたま覚えてたところを言ってみただけ」

そう言うてから、葉月は興味津々といった様子で身を乗り出してきて、

「ねえ、叔父さんのお友達って、本当にあの本を書いた萩村さんなの？友達にフアンの子がいるの。もしそうなら自慢できる」

「それは、萩村が聞いたら喜ぶな」

「おおつ、やっぱりそうなんだ。でも、あの有名な歴史家さんと、一体どういう関係？」

「いや、萩村は歴史家じゃないよ。彼は日本文学の研究者だ」

「同じようなものじゃない」

「ぜんぜん違うだろ」

葉月は早く質問に答えろと、じつと目で訴えていた。明彦は簡単に学生時代の友人だと答えようとしたが、そう答えることに、なぜか少し苦いものが感じられた。今一度冷めたコーヒーを口にす。そして、再び目の前の一輪挿しの楓に目をやり、そのまましばらく黙っていたが、やがて、小さくため息をもらすように、葉月にこう言った。「萩村とは、同じ大学だった。あの頃は、こいつとは一生の付き合いになるだろうと、俺は思っていたのだがな——」

## 第2章

1

アマゴというのは、ヤマメの静岡近辺での呼び名だと、なんとなくそう思い込んでいたのだが、萩村が別の魚だと主張するので彼の下宿先に写真を見に行つたのは、大学三年の春のことであった。見せてもらった写真は二十センチほどの大きさの川魚を川石に寝かせて撮つたもので、一見するとヤマメにしか見えなかったが、言われてみれば確かにヤマメにはない赤い斑点が体側に散らばっている。明彦が日頃溪流釣りのフィールドとっていた奥多摩辺りではあまり見かけない模様で、きれいな魚だと思った。萩村の家は中伊豆の修善寺町にあり、そこから狩野川の溪流ポイントまで車ならそれほど時間もかからずに行け、ここではアマゴもよく釣れたのであった。写真は去年の夏休みの帰省時に撮つたものであるとのこと。そのときの引きの強さやその日の釣果などを話しているうちに、彼の話はそうした釣り

の話から、やがてその家やそこに暮らす彼の家族のこと―祖父や姉の話へと、自然に移っていった。その家は、元々は中伊豆の風景を好んだ萩村の祖父が別荘として建てたものだった。まだ京都に住んでいた頃は萩村自身も両親にくつついて幾度か遊びに来たこともあったが、彼が本格的にそこで暮らすようになったのは、中学二年の夏からだった。

彼の祖父は、本名は萩村熙衛（ひろえ）といったが、雅号の溪舟という名の方が世間的には広く知られていた。京都の画壇で活躍した著名な日本画家であり、伝統に則った格調の高い画風で知られ、殊にその描く線は一本一本が繊細で美しく、溪舟の線と言えば多少なりと現代日本画に興味のある者なら知らない者はないほど有名だった。一方でこの画家は孤高な人物としてもよく知られており、元からあまり人と接するのを好む性質（たち）ではなかったが、七年前に長年連れ添った妻を脳溢血で亡くし、さらにその翌年には長男夫婦を突然の事故で失い、そういう身近に続いた愛する者達の立て続けの喪失によってその傾向

がますます強まっていくのと同時に、ひどく気難しい性格ともなり、そのうちに多くいた弟子たちも、一人また一人と離れていった。それでも絵の制作だけは一人黙々と続けていた。その筆は晩年になるほどいよいよ凄みが増して、溪舟の絵は後期のものほど価値が高いとも言われた。しかし、そんな折に再び大きな不幸が彼を襲った。眼の病気に罹り、視力のほとんどが失われてしまったのだった。絵さえ断念せざるを得なくなった彼は、失意の底でそれまで細々とあった画壇との交流もすっかり絶ち切り、すべてを忘れようとするかのように京都の家を処分しそのまま修善寺の別荘に引き籠るようになった。

萩村は両親を亡くしてからは祖父の許で暮らしていたので、三つ上の姉と一緒に祖父についてその家で生活するようになったが、別荘とは言うてもそこはなかなかの広さを持った純日本風の建物で、ほかに何人かの使用人もいたとはいえ祖父と姉と三人で暮らすにはいささか広すぎ、そのためかそこにはいつもどこか寂しいものを感じられる印象があつて、帰省の度、今でもまだ何か



しら馴染めないものを僅かにその家には感じる事があると萩村はこぼすのだが、それでも帰るのが嫌だというのではなく、むしろそこには姉さんがいるから、時間が許せばもっとしばしば帰りたいのだが、とも萩村は言うのであった。いつも取り澄ました萩村の意外に甘えん坊な一面を見た気がして、思わず明彦がそれをからかうと、そうではないと小さく首を振ってから、萩村は少し寂しそうにこう言い足した。

「今の俺は、お祖父さんのお世話を、全部姉さんに押し付けてしまっているからな」

そこで初めて明彦は萩村に、彼の姉の美佐子には祖父の溪舟とも弟である彼自身とも血の繋がりが無いことを打ち明けられたのだった。

彼の父、萩村宗泰（むねはる）は、父親の画才を濃く受け継ぎ、その下について自らの腕を磨く傍ら、京都の美大で日本画について教えてもいた。その頃同じ大学に田中鞠子という女性も勤めていた。ほどなく二人は恋仲になり、結婚した。やがて夫婦の間に萩村が生まれたが、その後鞠子は難病に罹り、萩村がまだ幼い頃にこの世を去った。

以後小学三年まで萩村は父親の手一つで育てられたのだった。一方、美佐子の母親は、梓といって、その当時溪舟と親交のあった鈴木御楓（ぎよふう）という画家の親戚の娘であった。こちらも美佐子が幼いときにすでに寡婦となっていたので、年も合うことから溪舟が二人を引き合わせたのだった。

ところで、溪舟には宗泰の下にあと息子が一人と娘が二人いた。次男の武彌（たけみ）は兄のようには才能に恵まれず、そのため絵の方は早々に諦め大学卒業後は大阪の商社に入ったのだが、無茶な投資に手を出し悪い癖があつて、失敗するたびにちよくちよく兄や父親のところは無心に来た。長女の波菜子（はなこ）は老舗の和菓子屋に嫁いでいたが、姑との折り合いがどうにも悪く、何かあればすぐに実家に戻ってきて父親に姑の愚痴を零すのだが、父親はそんな娘の愚痴にほとんど聞く耳を持つてはくれず、戻るたびに帰れときつく波菜子を叱った。そんな父親の叱責に波菜子は不満を抱きながらもいつも素直に従ったのだが、それはいずれ父親が死んだときにその相続

した財産を姑にひけらかせてやろうと目論んでいたからだ。次女の栞（しおり）は東京の大学を卒業した後も京都には帰らず大手の銀行に勤めたが、二十七歳のときにスキー場で知り合った男性と結婚し、今はサラリーマンの妻となっている。一男一女に恵まれたが、独身時代のように派手にお金を使えない現状にいささか倦んでいた。そのように三人が三人とも父親の資産をあてにしていたところがあつたので、その父親が京都の家をほとんど投げ売りに近い形で安く売り払ってしまったと知つた際には、親子でひどい喧嘩となつた。

いや、喧嘩というより、それは一方的な罵倒であつた。叔父や叔母達に激しく詰め寄られ、怯えたように祖父が、当時まだ高校生だった美佐子の背に隠れて震えていたのが、萩村にはその後もずっと忘れられない光景となつた。高貴と思つていた祖父がそのときにはひどく卑小な存在に見えて、異様に哀しい気持ちに襲われたことを、今でも昨日の事のように覚えていると萩村は言つた。さんざん叔父達の容赦のない罵倒に耐えた後、

溪舟はやがて、ほとんど半泣きになって、困り顔の美佐子の後ろから顔を出すと、彼らに二度と自分の前に顔を出すなと怒鳴つた。そしてそのあとは、叔父たちが何を言つても、それ以外の返答を一切子供達に与える事なくひたすら帰れ帰れと繰り返し、最後には、頼むから帰ってくれと、さう言つて泣きだした。

諦めた叔父達がようやくその場から去つたあとで、溪舟はたがが外れたように、

「なんやあれは、なんやあれは！」

と叫んで、何度も畳を殴りながら、その白濁した目からぼろぼろと涙を流したのでつた。

後にも先にも、祖父のそのような醜態を萩村が目にしたのは、その一度きりであつたという。

そのようなこともあつて、叔父達とはその後はほとんど交流がなくなり、彼らが伊豆まで父親を訪ねてくることも、それからは一度もなかつた。そのため、とのみは言えないのかもしれないが、美佐子は高校を卒業した後はずっと目の不自由な祖父の傍らに付き添つて、毎日その生活を助けて暮らすようになった。自分の学費も、生活費も、

全て祖父から出ていることを思えば、そのことに萩村は、感謝と、恩と、それから、何とも言えない後ろめたさも、同時に感じているのだと、そう明彦にその心情を打ち明けた。

この議論好きで、議論となればいつも舌鋒鋭く切り込んでくる友人の、いつにない神妙なその面持ちに、明彦は微かに胸の痛む思いがした。しかしそれ以上に強く感じたのは、自分と同年のはずなのにこの友はすでに途方もないものを背負って生きていくという感覚だった。急に明彦には、目の前の萩村が、何かとても大人っぽく、また、とても深みを持った人間に見えてくる感じがした。一言で言えば、このとき明彦は萩村に対し敬意に近い感情を抱いたのである。今、この友のために自分にできる事は何だろうと明彦は考えた。その答えはその場で見つけることはできなかったが、ただ、萩村のそのほとんど自分を曝け出すような告白に対して、せめて誠実でいなければならぬという思いだけは強く感じていた。いつか、自分の中にも何かの秘密が生じたとき、そのときには、きっと自分も、この萩村にだけはそ

れを打ち明けるのだろうか。この時明彦は青年らしい生真面目さでそう思い、そしてそう思える友人に、彼自身の秘密をこうして打ち明けられたことに、何か晴々しいものの感じられる思いも、同時に味わっていた。

——それはともかくとして、萩村の話聞いて彼の祖父や彼の姉に強く興味を惹かれたのも事実で、もしもその折があれば、その人達にも一度会ってみたいものだ、明彦は思った。

「なんだか、暗い話をしてしまったな」

と、不意に萩村が照れたように鼻の頭を搔いた。明彦は「いや」と首を振ってから、少し重くなつたその場の空気を和らげようと、

「ところで、これはすごく大事なことだが、お前のお姉さんって、美人か？」

と少しおどけた口調で萩村に聞いた。萩村は瞬時きよんとした顔をした。それから考えるような素振りをしてから、

「まあ、普通だな」

「普通か。でも、突然お姉さんができるって、どんななんだろうな」

「どんなって……」

と萩村は、困ったような、照れたような、そんな微妙な顔をしてから、

「まあ、普通だな」

「また普通かよ！ちきしょう、なんかうらやましいぜ。うちは男の兄弟だから、顔を合わせれば喧嘩ばかりだしな」

「そういえば、俺は姉さんと喧嘩をした事がないな。別に遠慮してるとか、そういうんじゃないんだが、姉さんは、滅多に怒る事のない人だから」

「くそお、お前の姉さん俺にくれ。代わりにうちの兄貴をやるから」

「あほう。——なんでこんな話になったんだ？そうだ、アマゴだ」

萩村は無理やり話を元に戻すと、今度の夏の帰省時にアマゴ釣りを案内してやるから一緒に来ないかと明彦を誘った。明彦はその場で即座にOKした。

## 2

夏が来た。大学が休みとなり、春に約束していたとおり明彦は萩村の帰省についていった。萩村が車を出し明彦がそれに同乗したのである。三島ICで東名を降りたあと、車は国道136をひたすら南下し、やがて車幅の狭い町道に入っていた。その道を右に左に蛇行しながらしばらく行つた後、構えの立派な一軒の邸宅の門の前へ乗り付けた。駐車場へ車を入れてくるからと一旦萩村はそこで明彦を降ろし、邸（やしき）の裏手へ車を運んでいった。すでに西日が射し始めている時刻であったが、車内のクーラーに慣れ切つた体には夏の陽射しは突き刺すように感じられた。先に入つてると萩村に言われていたので、明彦は釣り具や着替えを入れたバッグを肩に担いで門の中へ進んで行つた。門を入るとそこは涼しげな木陰に覆われていた。見上げれば木々の枝々が空を覆わんばかりである。枝々に無数に繁る緑の葉の、その独特の形から、それらはみな楓の木であることが分かった。玉砂利の敷かれた小径を辿っていくと、やがて三段ばかりの石組みの階段の先に、灰色の瓦を葺いた母屋が見えてきた。平屋の大き

な建物だった。建物の前面に並んだ幾本かの柱の間のガラスの引き戸は開いていて、その内側に廊下が通っているのが見えた。さらにその奥の障子戸の方は閉じていた。建物の前にはぼっかりと空間が空いていて、その周囲に躑躅も丸く配されていたが、裏手の方から邸を囲んでいる樹木はそのほとんどが楓のようであった。三段の階段を上がると、そこから玄関まで敷石が通っていた。日本家屋らしくあちらこちらによく整えられた緑を配しているのが目に心地よく、それらを鑑賞しながら歩いていくうちに、気が付くと明彦は玄関の前まで来ていた。玄関は九十センチほどの幅の格子戸を二枚に組んだ引き戸で、格子の間には摩りガラスが嵌め込まれていたので外から中は見えなかった。

玄関前で立ち止まった明彦は、ふとどこからか小さく女性の声が聞こえているのに気がついた。そのまま明彦は戸口で萩村が来るのを待った。しかし萩村はなかなか来なかった。立ってるだけで汗が流れるような暑さであったが、それだけに風が心地よかった。さわさわとそこの葉を揺らし

ている風の音に混ざって、微かなその声は、まだ聞こえていた。目を閉じ、耳を澄ますと、その声はつきりしてくる感じがした。明彦はそれがフランス語の詩を朗読している声だと気づき、

「コクトーだ」と呟いた。

それは昔から自分も好きな詩人だったので、明彦は興味を惹かれ、声に導かれるように木の間にぬって歩いていった。やがて障子の開け放たれた部屋が見えてきた。樹木の陰からそと中を窺うと、椅子に深く身を預けた、紺がすりの大島を端正に着こなした老人の横に、二十代半ばと見える着物姿の女性が座っていて、単行本サイズの本を片手に静かに詩を朗読していた。

そこには、何とも説明のつかない不思議な美しさを感じられた。老人は、頭髮も髭もすべてが白かった。その深い皺に覆われた目をやさし気に半開きにしながら、薄く微笑を浮かべて穏やかに詩の朗読に耳を傾けている老人のその様子には、枯れた雅ともいえるような、あるいは打ちひしがれた矜持とも感じられるような、一種いいようなな

い気品と哀愁とが同居したような寂しげな美しさが漂っていた。一方女性の方は、着ている着物は薄色の生地に菊を散らした文様のもので、色は派手過ぎも地味過ぎもせず、その女性のまだ若い  
がそれでいてとても物静かな様子によく似合っていた。その声は儂いながら凜として、また愛らしくもあつた。そしてそのフランス語の発音はほとんど正確で、耳障りなところが一切なかった。もともと明彦は訳語より原文を好む方であつたから尚更そう聞こえたのかもしれないが、それにしては女性の声で読まれるフランス詩というものがこれほど可憐に聞こえるものとは、明彦が今まで知らなかつた事だつた。それはともかく、きれいな人だと明彦は思った。

「何が普通だよ……」

思わず口の中だけでそう独語したとき、不意にその女性の目がこちらに向いた。詩の朗読は止めないまま女性が軽く会釈したので、明彦も少し慌てながら会釈を返した。

「姉さんは、ああやつてよくお祖父さんに、お祖父さんの好きな詩を読んで聞かせてるんだ」

声がして振り向くと、いつの間にか萩村が横に立っていた。

「遅かつたじゃないか」

「幸子さんに捕まつててな」

幸子さんというのはこの邸の通いのお手伝いさんだつた。もう六十に近い女性だが元氣な人で、萩村も子供の頃はよく遊んでもらつたのだそうだ。決して嫌いな人ではないのだが、一度捕まると話が長いのが玉に瑕だと、そう言つて萩村は笑つた。

「それにしても上手だな。お前の姉さん、フランスで暮らしていた事があるのか？」

「それはお祖父さんだ。若い頃に絵の勉強のため単身パリに渡つた事があるらしい。日本画の大家みたいに言われてるが、お祖父さんは結構西洋画にも精通してるんだぜ。姉さんのは、そのお祖父さんの仕込みだ」

「へえ。意外だな」

そんなことを萩村と話しているうちに、ふと女性の声が途切れた。女性は老人の口元に耳を近づけたあと、一つ頷いて、それから縁先まで歩みを

進めて樹間の二人に声を掛けてきた。

「そこにいるのは、静也と、それから、お友達の間さんですね。初めまして、私は静也の姉で、美佐子といます。今日おいでになる事は静也から聞いていました。お祖父さんがお話をしたいそうですので、どうぞこちらへいらしてください」

明彦と萩村は、お互い顔を見合わせて苦笑し合ってから、美佐子に招（よ）ばれるまま母屋に近づいていった。初対面なのに少し無作法にも思えたが、さつさと萩村が縁先から家の中に入がってしまったので、自分一人が玄関に回るのも変なので萩村に従い部屋に入ると、そこは八畳ほどの広さの畳の間で、中にはほんのりと香の香りが漂っていた。

溪舟は、目を半開きのままその白濁した瞳を僅かに上げて、「よう来た」と微笑した。

「お祖父さんもお元氣そうですね」

そう言うと、萩村は東京土産だと言ってスポーツバッグから菓子を取り出し美佐子に手渡した。

「静也からおこしを頂きました」

と美佐子が目の見えない祖父に教えた。溪舟は僅かに頷き、ありがとうと小声で言った。それら一連の流れるようなやりとりを、明彦は一枚の絵画を眺めるような心地でしばらく眺めていたが、不意に自分もお土産を持ってきたことを思い出し、慌てて携えてきたバッグの中に手を突っ込んだ。が、すでに萩村は久しぶりの祖父との会話を始めていたので、今は口を挟むのは遠慮した方がいいと、そつとバッグから手を戻して居住まいを正した。

「勉強はしつかりやつとるか？」

「ええ。まあまあ、かな」

「まあまあとは、曖昧やな」

「主席とまでは行きませんが、とりあえず単位は取れてます」

「まあ、学生は楽しむもんや。楽しめるのも、今のうちやからな」

「お祖父さんの方はどうです？体調とか変わりないですか？」

「変わりない、と言いたいが、さすがに年や。近頃では庭に出るさえ億劫だな」

そのようなやり取りの間に、ふと美佐子の視線が自分に注がれているのを感じ、明彦は軽い緊張を覚えた。思い切つて美佐子の方に顔を向けてみると、美佐子の口元に微笑が浮かんだ。彼女の微笑が身じろぎに、ようこそと言われているような気がして、明彦も笑顔を返しかけたとき、

「こちらは大学の友達で、関つていいです」

と、萩村がようやく明彦を祖父に紹介した。

「関です。すいません、せつかくの水入らずのところを、なんかお邪魔してしまつてみたいで。お邪魔でしたら、ほんと、外で待つてますので」

と明彦が身振りを交えていかにも申し訳なさそうにすると、美佐子がくすりとした。溪舟も笑いながら、

「そんなん気にせんでええ」

と言つて、近くに来るよう手招きした。近くに寄ると、もつと近くにと言うので、戸惑つて美佐子を見ると、お願いしますというように頭を下げた。思い切つてもつと近付くと、ほとんど老人の目の前まで来ていた。溪舟は両手をそつと明彦の頬に触れさせた。そして顔の形をなぞるように明

彦の鼻筋や目元にゆっくりとその骨ばった指を滑らせてき、

「ええ顔や」

やがて満足したように手を離すと、そう言つて笑顔になった。

「ずつと静也と、仲良うな」

「はあ」

困惑しながら明彦は曖昧に頷いた。萩村を見れば、そんな明彦をにやにやと眺めていた。笑うな、と明彦は中指を立てようとしたが、さすがに美佐子の前でそれはできなかつたので、拳だけを軽く上げた。

―風に乗つて、遠くの寺の鐘の音が、微かに届いた。

よほど詩を読んでいた時の彼女の姿が印象に強かつたのか、萩村の家に泊まつた最初の夜から明彦の夢に美佐子が出てきた。どんな夢であったのかは目を開けた瞬間に忘れてしまつたが、ただ



何とも言えない強い幸福感だけは目覚めた後もしばらく余韻のように残っていて、それが邪魔となってそのあとは目を閉じてても布団を被つても再び眠気がのぼってきてはくれそうもなかった。諦めて身を起こすと、障子にうつすら蒼く明かりがほのめいていた。もう朝であるのは間違いなさそうだったが、夏の朝のこの暗さでは、まだ相当に早い時間であることも間違いなさそうだった。隣では萩村が微かな寢息を立てていた。身を縛って寝ているのではないかと思うくらいに布団にまったく乱れがないのが、いかにもこの男らしく、早朝の淡い明かりの中に微かに浮かぶその端正な寝顔を見て、こいつは本当に貴公子だな、と思った瞬間に、日頃の彼の口の悪さを思い出し、思わず吹き出しそうになった。枕元に置いた腕時計を拾い上げて時刻を確かめてみる。そのアウトドア用のデジタル時計が表示していた数字は、午前四時十三分。起きるには早すぎる時間だったが、どのみちすっかり眠気は失せてしまっていたので、萩村を起こさないようにそっと布団から這い出すと、音を立てないように部屋を抜け出て、廊

下で夜着に借りた浴衣の乱れを直してから、ちょうど沓脱石の上に萩村の下駄が置いてあったので、それを拝借して庭に出た。

早朝の庭は、周囲の楓の葉も、躑躅の葉も、全てが日の出前の薄明の中にその緑色を淡くすませばんやりしていた。ちろちろと小さな音が聞こえている。それは池に注ぐ水の音である。昨日萩村が庭を案内してくれたので明彦はそれを知っていた。中にはたくさんの錦鯉が泳いでいて、そのどれもがびっくりするくらいの値段なのだった。しかし目の見えないあの老人には、その鯉も、この庭も、それらの美しさはもう思い出の中にしかないのだろうと、そんな事を思つて少し哀しい気持ちになったとき、いつの間にか明彦は門の所に来ていた。昨日は釣りに行くには遅い時間だったので暇つぶしに萩村に邸の中を色々案内してもらったが、外にまでは行つてなかったもので、その辺りを散歩するつもりで門を出てみた。外に出ると、目の前は幅員六メートルほどの狭い町道で、その反対側は竹林となっていた。低い竹矢来が道路と竹林を分けて長く続いている。門を

出て左へ行けば、右には竹の葉が茂り、左には塀の上から無数の楓が枝を伸ばしている。今はどちらの葉も緑だが、秋になって楓が色づけば、それらの赤と緑が美しいコントラストを作つてきつと絶景だろうと明彦は思った。からんからんと下駄の音がよく響く。まったく静かで、清々しい朝の道だった。不意にその静けさを破つてエンジン音が轟いてきた。原付バイクに乗つた新聞配達に辺りの静けさが際立った。いつしか木陰の小徑を通り過ぎ、日当たりのいい住宅地を歩いていく。そのままどこへ向かうというのでもなく、氣の向くままにふらふらと歩いていった。やがて朝日が顔を見せ始めた。辺りはもうかなり明るい。それを見てようやく明彦は、そろそろ戻るかと、来た道を引き返した。

——もうすぐ邸の入り口に着こうとしていたとき、不意に脇の通用口から人が出てきた。美佐子だった。今朝の彼女は昨日とは打って変わつてとてもラフな格好をしていた。上は淡いブルーのブラウスに下は臙脂のフレアスカート。髪は簡単に

ひつつめただけで、そして手には赤いリードを握っていた。リードの先では薄い茶色の中型の犬が、なにやら楽しそうに尾を振りながら、しきりに彼女を引つ張っていた。ジョンだ。昨日萩村が紹介してくれた、この家で飼われている秋田犬だった。

「あら？」

と、そこに明彦を見つけて、美佐子が怪訝に首をかしげた。

「お、おはよう、ございます……」

と、突然の事に狼狽えながら明彦はようやくそう言った。

「どうなさつたの？こんな早く」

「いや、なんか起きてしまったもので、ぶらぶらと……お姉さんは、ジョン君のお散歩ですか」

「え？——ああ、静也に聞いたんですね。はい、お散歩です」

美佐子が会釈して通りすぎていくのを、一度は見送つてから、すぐに明彦は「あの！」と叫んでその後を追いかけた。

「あの、お散歩に付き合つてもいいでしょうか？」

ほら、ついでしたし」

なんのついでか自分でも理解してなかったが、美佐子は一瞬きよとんとした顔をしたあとで、

「ええ。喜んで」

と、にこりとしてくれた。すでに太陽は東の空に丸くあつて、紅から蜜柑色に変わりつつある。竹の葉も、楓の葉も、その鮮やかな緑の隙間に光を零してきらきらしている。秋になれば、この眺めは凄そうですねと、明彦は先ほど思つたことを口にしてみた。美佐子はそれはとても美しい眺めになるのですよと答えた。

「東京に比べれば、何もないところですけどね」

そう言う美佐子の言葉にも、やはり京風のアクセントが少し混ざつていて、それが明彦にはとても美しく聞こえた。

「そう言えば、ここに来る前にちよつと旅行ガイドとか読んでみたんですけど、こつちにも嵐山とか渡月橋とかあるんですね。へえ、つて思いました。なんだか、京都の嵯峨野みたいで」

「そういえばそうですね。こつちの方のは”らんざん”って読むみたいですが」

「そうなんですか。でも字は同じだし、何かいわれがあるんですか？昔、都のお公家さんがこの辺りに住んでたとか」

「さあ。そういうのは私はさっぱり。静也なら、その辺詳しいと思うのですけどね」

「詳しいでしょうね、あいつなら。でも下手に萩村に聞くと、きつと当時の京都にとつて伊豆とは何かつていう話から始まつて、そもそも嵯峨野とは、そこから源氏の六畳御息所に話が繋がつて、さらにそこから斎宮、伊勢神宮と話がどんどん広がつていつて、きつと一時間以上はあいつの講義を聞かされる羽目になる」

「ふふ。関さんに対してもそうなんですね。私もよく叱られてます。姉さんは、何にも知らないんだなあつて」

「お姉さんにそんなことを？」

「美佐子でいいですよ。ええ。しよつちゅう」

「とんでもない奴ですね」

「子供の頃から、あまり身体が丈夫な方ではなかったのに向こうつ氣ばかり強くつて、いつも誰かと争つていましたね。そのたびに、うちに帰つ

てから自分は悪くないって、目にいっぱい涙を溜めて……そういう子でした」

……今とあんまり変わってない。

子供の頃のそういう萩村を、明彦はすんなりと想像できた。

「でもね、関さん。弟はとても優しいところもあるのですよ。」

——関さんは、六歌仙ってご存知ですか？」

「六歌仙？ああ、聞いたことがあります。確か、代表的な六人の歌人のことですよ。在原業平と小野小町と、それから——松尾芭蕉？」

最後のはわざと間違えた。美佐子は明彦の期待に応えてくすりと笑ってくれた。

「ほかには遍昭、文屋康秀、喜撰法師、大伴黒人。

お祖父さんがまだお元気だったころ、この六人の歌人を連作として絵に仕上げたことがあるんです。お祖父さんの手掛けたものの中でも、それは傑作と言われています」

「そうなんですか。見てみたいな」

「見れますよ。確か今は京都市の美術館に展示されているはずですから。六枚の絵それぞれには、

それぞれの歌人を代表する歌が賛（さん）として一首ずつ添えられています。お祖父さんのご友人のさる書家の方が入れて下さったのだそうです」

「賛？」

「絵の中に入れる詩歌のことです。——弟が、古典研究を将来の道に定めたのは、きっとそれが理由だったのだと思います」

それは初めて知ることだったので、明彦は興味を惹かれた。

しかし美佐子の話は、明彦にはなかなか理解しづらい心情だった。元々萩村には祖父から父へと受け継がれた絵の才能があり、小さい頃には祖父からも父からも将来を期待されていたが、やがて父親が亡くなり、祖父も絵を断念した後は、彼もまた二度と絵筆を握る事がなくなった。絵が祖父にとつてすでに哀しみの大本となつている事を感じ取ったからであつた。それでもそのほかのところで祖父に寄り添って生きようしたとき、そこで彼が見出したのが、六歌仙の和歌に代表される古典研究の道だったのだと、彼女は言うのであつた。これまでも溪舟はその手掛けた作品の多くに

古典を画題として取り入れてきた。そういう意味では、古典研究も確かに溪舟の歩んできた道の継承であると言えなくもない。しかし、と、やはり明彦には思えてならない。それではまるで、祖父のために生きてるようなものではないかと。萩村には、そういうのは、少し似合わないような気もした。

そういえば、萩村も以前、姉の人生は祖父の手に繋がれているというような意味のことを言っていたような……。

昨日会ったあの老人は、明彦には全く悪い人間には見えなかったのだが、そう思うと、その人が何かこの姉弟に絡みついた鎖のようなものにも思えてきて、妙に落ち着かない気分になった。

いつの間にか二人は明るいあぜ道に入っていた。気が付くと周りには、数えきれないほどの向日葵（ひまわり）が、その黄色い花を大きく開いて視界いっぱいに広がっていた。

「ここ、きれいでしょ」

立ち止まって美佐子が言った。朝風がふわりと彼女のおくれ毛を流していた。明るい瞳で向日葵

畑を見つめる彼女の目には、だが明彦が想像したような不幸の影は、微塵も見えなかった。

「折角うちに来てくださったのですから、関さんここをお見せしたくて、今日はいつもとコースを変えてみました。ジョンには悪いけど」

と美佐子は笑った。別にジョンは不満そうな様子も見せずに彼女の足元でちよこんとしていた。「とても素敵なお所ですね」

美佐子の視線の先を追って明彦も向日葵畑を見つめた。夏の朝日の下に、無数の向日葵が明るく輝いて、優しげにそこに靡いていた。

4

戻った時にはすでに萩村は起きていた。何をしていたのかと聞くので、美佐子のジョンの散歩に付き合っていたと正直に答えた。向日葵畑を見たことを話すと、姉さんらしいなと笑った。萩村が子供の頃から意地っ張りだったという話を聞いたことを話すと、余計なことを言うといひ顔をした。そのほかにも溪舟の傑作に六歌仙というのが

あるのを聞いたところまでは話したが、それ以上の事は言えなかった。それが何か萩村に対して秘め事を持ってしまったような気にさせ、明彦をまた落ち着かない気分にしたが、朝食の後に萩村の車で渓流に連れていかれると、そういう気分もどこかにすっ飛んだ。

舗装もされていない林道の入り口近くに、三々四台くらいの車を置けるスペースがあつて、そこから山道状に木を組んだ道を下っていくと、やがてさあつと爽やかな水音が高まってきた。木立を抜けると、目の前に五メートルほどの高さの滝が現れた。樹木の鬱蒼とした中に滝壺はどこまでも青く透明で、そこから岩や石を削りながら水流が白い飛沫を立てて下流へ水を注いでいるのが美しい。しかし、そうした美しいとか神秘的だとかいう感想を抱く前に、まず明彦が思ったのは、その川の姿を見てここはよく釣れそうだという事だった。

「ここは地元の者にもあまり知られていない場所なんだ。まあ、ちよつとした穴場だよ」

と、棹をセットしながら萩村が言った。萩村は

足を悪くしているはずだが車を降りてからここまでの道を下るときにも、それほど危うい様子は見せなかった。しかしさすがに毛針を川の瀬に投げてからはそこからあまり動かなかった。そういうところが、あちこち頻繁に動き回る明彦とスタイルの違うところで、一緒に行くときよく目障りだと萩村に言われた。

最初に当たったのは萩村だった。遠目にはそれほど大きな大きさに見えなかったが、萩村が呼ぶので近くに行くと、釣りあげたのはアマゴであった。前に写真で見たものよりも、それはずつと美しい模様をしていた。

「きれいなものだな」

「アマゴの名の由来を知ってるか？」

「知らん」

「アマゴのアマとは美味って意味だ。つまりアマゴとは美味しい魚って意味だ」

「ヤマメみたいなもんだろ。美味いに決まつてる」

「こいつの塩焼きはお祖父さんの好物なんだ。たくさん釣って、後で幸子さんに焼いてもらおう」

「お祖父さんか……」

「なんだ？」

「いや。そういうことなら俺も釣らなくちやな」と明彦は萩村から離れ、川の中ほどの石の下辺りにそつと針を落とした。

その日の釣果は二人合わせて二十尾ほどであった。

家政婦の幸子はおしゃべりなだけの女ではなく、料理も相当上手かった。なにしろ萩村の話では美佐子も幸子から料理を教わっているというくらいである。夕食にはアマゴの塩焼きのほか、ナメコの味噌汁、里芋のあんかけ、蕪の漬物、ほかにも小鉢に山菜が盛られていたりした。そのどれもがやはり美味しい。溪舟と美佐子の姿はなかつた。静けさを好む溪舟はいつも食事は美佐子と二人でとっているのだという。それでも、おしゃべりの幸子をはじめとするこの邸の使用人や庭師など数人が集まっていた。夕食は賑やかだった。

夜になった。明彦は萩村と一緒に縁側に座って星を見ていた。まだこの辺はそれほど空気が汚れていないようで、夜空を走る銀河もはっきり見え

る。星の光もその一つ一つが力強かった。ふわりと螢が庭に迷い込んできた。最初二匹で連れ添っていたのが、その後からふわりふわりとたくさん螢が姿を見せ始めた。きれいだなあと、今は都会ではあまり見かけることがなくなつたその光景に明彦は感嘆の声を上げた。萩村は源氏物語の螢の巻についての話をし始めた。しかし以前源氏を読んだ時の印象で、明彦はどうにも光源氏という人物が好きになれなかつたので、あのような男を主役にした物語がなんで千年も読み継がれてきたのか理解できないと萩村に言つた。そう言つたまでならよかつたが、その後で、そんなのを研究しているお前も相当物好きだ、とまで言つてしまつたのは余計だつた。それに萩村はカチンときたらしく、そこから彼の舌鋒に火が付いた。

美佐子がお盆に西瓜を乗せて縁側に姿を見せたのは、ちようど二人が語り合つている、というより明彦が萩村にやりこめられている最中であつた。

「要するにお前は、源氏の中に正義が見いだせない、物語を貫くテーマもなく、人間の善悪につい

ての考察が不十分だから、あれは駄作だと言いたいわけだな」

と挑戦的に言葉をぶつけながら、萩村は美佐子を持ってきた西瓜のひとつ切れをひったくって囓り付いた。

「いや、駄作とまでは言っていないだろ」

と、明彦は美佐子にお礼をする意味で頭を下げながら、その一つを取って、

「ただ俺は——」

と反論しかけたが、萩村はそれを遮って、

「お前は源氏をそういう理屈でしか読もうとしない。要するに最初から読み方がなっていないんだよ。例えば大和魂って言葉があるな。今でこそこの言葉は何やら勇ましい意味で使われることが多いが、もともとはこれだって源氏の中に出てくる言葉だ。紫式部はこれをどういう意味に使ってるか知ってるか？和魂漢才の和魂の部分つまり、中国思想の理念に対する一種のアンチテーゼとしての、日本の風土に根差した生活知言いかえれば実生活における日本人の良き有り様を導くものとしてこの言葉を使っている。その

根底にあるのは美だ。姿の良さ、振る舞いの良さ、感性の良さ、理念的な善悪ではない、人生を本当に豊かにするのはそういう美を知る目、すなわち情緒であるという事を、すでに千年前に紫式部は見抜いていたんだ。確かに源氏はその倫理性からはかなり問題の多い人物だよ。あちこちの女房に見境なく手を出したり恋敵を苛め抜いたり、最も問題があるのは帝の中宮を寝取って自分の子を孕ませてしまう事だが、だがそれを罪とするのはあくまで理念の側の話だ。そういうのは、そこに美しさがあるか、そこにあわれが感じられるか、そういうものにとってはまったく関係がない事だ。五十四帖を通じて源氏を貫いているのは、終始一貫して徹底的にそういう情緒の世界なんだよ。そういう情緒の世界を、お前みたいな頭でっかちの唐変木はすぐに理念で読み解こうとする。だからそんな阿呆みたいな批判しか出来んのだ」

「こら、静也」

と、萩村がそこまで言ったところで美佐子が口を挟んできた。

「いくらお友達でも、そういう言い方は、関さん



に少し失礼だわ」

「姉さん、口を挟まないでくれ。今関の奴と大事な話をしてるところなんだ」

これ、大事な話なのか？と明彦は思ったが、口には出さなかった。

「お二人は、大学でもいつもこんなお話をされているの？」

と美佐子が、すっかりやりこめられている明彦にさらに助け船を出すようにそう聞いてきた。明彦はさっそくその船に乗っかって、

「いえ、普段はもつと馬鹿な話ばかりですよ。映画の話とか、釣りの話とか。なあ萩村」

「だいたいこの唐変木に文学の話をしたって通じるものか。姉さん、こいつはね、風も泉も、みんな同じものだなんて言う奴なんだぜ」

「え？」

と美佐子は、興味を惹かれたように明彦に顔を向けて、

「それってどういうこと？」

真つ直ぐに美佐子に見つめられ、明彦は少し顔を赤らめながら、

「風、つまり空気ですね。空気は約80パーセントの窒素、約20パーセントの酸素、それに微量な二酸化炭素やアルゴンなど、それと湿度を持つてると言う意味では水蒸気なんかも含めていいと思います。それらの混合物なわけですよ。一方水は、ご存じの通りH<sub>2</sub>O、水素2に対し酸素1

が結合した状態ですが、自然の水の中にはほかに窒素をはじめ様々な元素が溶け込んでいます。そういうのを全部ひっくるめて片っ端から原子レベルまで分解していけば、最終的にはだいたい同じものの集まりになるんじゃないかなって。そもそも自然界にはたった92種類の元素しかないんですから、どれだけ多様に見えてもこの世界のほとんどのものは、つきつめていけば結局は同じものの配列の違いに過ぎないとも言えるわけです。例えば、人間と、あの木々だって」

「面白い考え方ですね」

そう言って、美佐子もまた軒の先を振り仰いだ。夥しい星を背景に、楓の木々がその枝を四方に伸ばしていた。

「私という存在も、あの木々も、つきつめていけ

ば同じもの。私、今までそんな風にあの木達を見  
たことなんてなかったわ」

「姉さん、関の話に関心なんかするなよ。図に乗  
るから。こいつの言ってることは、要するに姉さ  
んだって薄皮一枚剥ぎ取れば骸骨と肉塊の集ま  
りに過ぎないって言ってるのと同じだ。そんなの  
で姉さんという個性の一体何を語ってるついで  
うんだ」

「いや、肉塊だつてさらに分解すればたんぱく質  
なりアミノ酸なり……」

「いちいち分解するな！」

「思わず萩村が叫んだとき、美佐子は吹き出した。  
ああ可笑しいと言いながら、珍しく声を立てて  
笑ったので、萩村は何か毒気を抜かれたような顔  
になって、それで、少しムキになっていたことを  
悟ったのか、頭を搔いて苦笑した。明彦もまた、  
美佐子の明るい笑い声に誘われて、自然に笑顔に  
なった。」

「思いつには、どんなものであれ核となるものが  
ある。哀しいなら哀しいなりに、美しいなら美し

いなりに、そこにはそれを思い浮かべる中心的な  
光景というのには必ずあるものだ。明彦がその日の  
事を思い出すとき、一方にほろ苦さがあり、一方  
に美しさがあり、その美しさを思うとき、いつも  
彼が思い出すのは、銀河と星と蛭と西瓜、そして  
そこにあの二人がいた、この夜の事であった。

#### 4

その絵のことは、明彦は今でもよく覚えてい  
る。それは一枚一枚が丁寧に額装されて壁に並べ  
られた計十枚の連作だった。一枚目の絵は旅姿の  
母と幼い姉弟の姿を描いたもので、画面の向かっ  
て一番右には振り分け髪の毛のまだあどけなさの残  
る少女が、氣丈に顔を上げながら、小さな弟の手  
を引いて歩いている姿が描かれている。姉に手を  
引かれた少年は、甘えるように母親を見上げてい  
るが、幼いながらもこの先自分達はどこへ行くの  
だろうという不安がその顔には漂っている。二人  
の母親は、杖をつきつつ、大丈夫と語りかけてい  
るような優しいげな様子でその子を見ている。一番

左端には、そんな母子を見守るように婢（はしため）が少し遅れて歩いているのが見える。そこは海沿いの街道で、柔らかな筆遣いで描かれた道端の草々先に海が描かれ、その薄く墨を流した暗い海が、母子のこれからに暗いものを予感させる。

二枚目の絵は逆巻く波に翻弄される二艘の舟を描いたもので、母と姉弟は別の舟から必死に手を伸ばしてお互いを呼び合っている。舟にはそれぞれ二三人のごろつきが乗り込み、母親の髪を掴んだり、少年の体を脇に抱えたりなど、その乱暴ぶりが容赦ない。

三枚目の絵は、白洲のような場に引き立てられた幼い姉と弟が、中央の壇上に座っている厳めしい老人に見据えられ、互いに身体を抱き合いながら怯えている。姉弟の周囲を手に太刀を持った男たちが取り囲んでいて、場面の緊迫が絵の隅々にまで満ちている。

四枚目の絵が描いているのは労働の場面で、姉の少女は波打ち際に立って汐汲みをし、弟の少年は山路で柴を背に負っている。姉弟の間には薄墨色の霧のようなものが刷毛で引かれ、それが空間

の断絶を表現している。

五枚目の絵には沼のほとりで旅立つ弟を見送る姉の姿が描かれている。薄く墨を流した沼の水面に不安をあおるように揺れているさざ波が、この先の少女の運命を物語っているかのようだった。

六枚目の絵は、左には寺の柱の陰に隠れて震えている少年の姿が描かれ、右には今しも寺に乗り込もうとしている追っ手とそれに対峙している和尚の姿を描いている。中央辺りにはこの寺の本尊である大日如来が描かれ、その全身から放たれる光明が、如来の少年への慈悲を表しているかのようだった。

七枚目の絵には、成長した少年が立派な若武者の姿となつて、都の妖怪を退治している場面が描かれていた。左手に太刀を翳し、右手は守り地蔵を握つて、それを妖怪に向かって突き出すと、そこから放たれた輝きに妖怪が苦しんでいる。哀調の濃いそれまでの絵とは打って変わって、躍動するような力強さが画面全体に漲っていた。

八枚目は、すでに絵ではなかった。ただいくつ

かの線が縦横に描かれているだけで、それも一本がか細く薄く、しかもそれは溪舟の筆とは思えないほどきたなく乱れていた。

そして九枚目以降の二枚は、まったくの白紙であつた。

「山椒大夫の連作です」

と美佐子が教えてくれた。

その部屋には、その絵のほかにも何もないのが印象的だつた。ただその絵を飾るためにだけこの一部屋があてがわれていたのであつた。それだけその絵が大事にされていたのは、それが溪舟の最後の作品となつたからであつた。

そういえば、色がついているのは六枚目までだつた。八枚目は、ほとんど目が見えない状態で描こうとして諦めた、その足掻きの痕跡だと美佐子は明彦に語つた。

「結局未完のままに終わってしまったものだから、お祖父さんは捨ててしまいなさいと仰るのですが、私には捨てられなくて」

「萩村溪舟画伯最後の作品、ともなれば、未完でもかなり価値の高いものなのでしょうね」

「ええ。ありがたいことに、とても高値で引き取りたいと申し出て下さる方もいるのですが、それより私にとつては——」と、そつと額に近づいて、その指先を、絵の表面に触れるか触れないかのぎりぎりのところでそこに描かれた少女の上に漂わせながら、

「知つてます？この子達、私と静也をモデルにしてるんです。お祖父さんはこれをご自分の最後の作品と定めて、そこに私達を描こうとされた。それが、なんだか私には嬉しくて」

と、美佐子にはにかむように笑つた。

さあつと雨脚が強くなつた。前日の正午過ぎくらいから降り始めた雨は、今朝になつてもやむ気配がなかつた。

「素敵な話ですね」

と答えながら、明彦は心の中にやるせなさのようなものも微かに感じていた。萩村にしても美佐子にしても、この姉弟にとつて、祖父溪舟の存在はどれほど大きな場所を占めているのだろう。他人が口出しすることではないとは思つたが、こうした美佐子に接すると、明彦はどうしてもそれを

思わずにはいられなかつた。

「ええ。私もそう思います」

それでも、そう言つてにこりとする美佐子の笑顔には、やはり少しの屈託もない事に、明彦は何か救われるような思いがした。

一方萩村の方は、美佐子とはまた違う思いをその絵には抱いていたようだった。

昼近くに萩村の病床を訪れ、そこで明彦は美佐子から聞いた話を萩村にした。すると萩村は布団の中で半ば熱に浮かされながら、吐き捨てるようにこう言つたのだつた。

「俺はあの絵が大嫌いだ」

萩村が熱を出したのは、昨日の雨が原因だった。昨日は朝から曇つていたが、まあ大丈夫だろうと気楽に考え釣りに行ったところ、やはり昼頃に雨が降つてきた。しかも悪いことに一気に土砂降りとなつたのだつた。すぐに道具を片付け車に避難したが、乗り込んだ時には二人ともぐしよ濡れになつていた。元々身体の強い方ではない萩村は、夕方頃には熱を出した。美佐子に布団に寝かされながら、萩村は明彦にすまんと言つた。明彦は気

にするなど答えた。翌朝になつても雨は上がらず、萩村の熱も下がらないまま、まだ布団の中だった。

「嫌いなのか」

と明彦が言うと、萩村はフンと忌々しそうに鼻を鳴らした。

「絵もそうだが、そもそも俺は、山椒大夫なんて話が大嫌いなんだ。どんな話か知ってるか？」

「知ってるよ、そのくらい。安寿と厨子王だろ？人買いにさらわれ母親と生き別れになつた安寿と厨子王の姉弟が、山椒大夫のところへ奴婢として働かされて、やがてそこから逃げるんだが、途中で追いつかれそうになつたので姉の安寿は厨子王を逃がすため沼に身を投げる。その後都で出世した厨子王は山椒大夫の所の奴婢を全員解放させると、盲目になつて鳥追いをしていた母親と再会してハッピーエンド。確かそんな話じゃなかつたか？」

「それは鷗外だ。原典である説教節の方はもつと残酷だよ。厨子王丸の逃亡を隠して安寿が山椒大夫の許に戻つたところで事がばれ、そこで火責め水責めと拷問を受ける。最後は膝の皿を錐(きり)

で穿たれた上安寿は炭で焼き殺されるんだ。厨子王丸だって姉をそんな目に遭わせた山椒大夫を許しはしない。大夫一族を悉く捕えて土に埋め、子供に竹鋸（のこぎり）を引かせて皆殺しだ」

「それは、壮絶だな」

と明彦は唸った。萩村は少し咳き込んでから、「なんにしたって、あの物語が描いているのは、姉の犠牲を当然のものとしてのうのうと生きてる男の姿だよ。そんな物語を題材にした絵など、俺にはただおぞましいだけだ」

明彦に背を向け布団の中で丸まっているその姿は、まるで拗ねた子供のようだと思つた。「お前の姉さんは、たぶん犠牲になつてゐるなんて思つてないよ。ひたすらお前やお祖父さんの事を大切に想つてる。それだけなんじゃないかな」

途端に萩村は明彦の方に顔を振り向け、その怒気を宿した瞳で鋭く睨みつけた。

「お前に何が分かる」

「いや、分からんよ。実はお前の事だつてよく分かつてない。まして昨日今日会つたばかりのお前のお姉さんの気持ち、俺に分かるはずがない。」

だた、だつたらいいなつて、だつたら、そいつはいい話だなつて、そんな風に思つたんだ」

明彦を睨んだ萩村の目にはまだ怒りが籠つていたが、それが少し和らいでいくのが、なんとなく分かつた。明彦は続けて、

「もしもそうなら、そうだな、それは、言わばこの世の花だ。そういう優しい気持ちがこの世の中のどこかにあるなら、そういう気持ちを抱いている人がこの世の中にどこかにいるなら、この世の中も、まんざら捨てたものじゃない。なんかそう思えるじゃないか。そういう風に思えるつて、なんだか幸せな事じゃないか。そうだろ？」

「この能天気め」

吐き捨てながら、ごろりと萩村は明彦にまた背中を向けて、

「豆腐の角に頭をぶつけて死んじまえ」

と、小さな声で呟いた。その声は明彦に耳にはつきりと届いていたが、あえて聞こえなかつたフリをして、

「なにか言つたか？」

と聞いた。そのとき、襖が開いて美佐子が姿を

見せた。明彦は心臓が飛び出るくらいに驚いた。まさか今の話、聞かれてはいなかったかと、おそるおそる彼女の様子を窺うと、普段の様子と少しも変わったところがなかったので安堵した。

「二人で何を話していたの？」

と言いながら、美佐子が萩村の傍に土鍋とコップを乗せたお盆を置いたので、もう正午を過ぎていたことによく明彦は気が付いた。

「いや、その、ほら、今日はいい天気だなあと。あはは……」

と明彦は慌てて誤魔化した。すぐに布団の中から萩村が「阿呆」と言った。外は土砂降りだった。

美佐子が首を傾げながら土鍋の蓋を開けると、途端にお粥のいい香りが辺りに漂った。明彦の腹がぐうと鳴った。

「あちらに關さんのご飯も用意ができてますから」

と美佐子に言われ、明彦は赤面して下を向いた。

「お祖父さんのお世話はいいのか？」

「今日は静也についてあげなさいって」

「いいよ。飯くらい一人で食えるから」

「私がしたいの。たまには姉さんらしい事もね」  
そんな二人のやりとりを背中に聞きながら、明彦は部屋からそっと出ていった。

5

翌日は昨日までの雨が嘘であったかのような快晴だった。釣り日和としては絶好だったが、萩村は熱が下がったばかりなので今日一日は大事を取ることにした。明彦の滞在は明日までととしていたので、結局最後の二日を丸々潰してしまったことになる。そのことを萩村は詫びたが、明彦の方もこのときは釣りに集中できるような状態ではなかった。

朝食後に萩村を見舞ったあと、明彦は落ち着かない気持ちを持って余して庭を歩いた。気がつくとい池の前まで来ていた。池端に立って水底を覗き込むと、金や銀、或いは紅白の錦鯉がゆつくりと身をくねらせながら泳いでいるその中に、ぼんやりと美佐子の姿が浮かんでくるような気がした。恋というのは、一度それを知らされると、後は強烈

にそれを意識せずにはいられなくなるものだ。明彦は、自分が美佐子に恋をしていたことを知ったことで、今はもうどうしようもなく彼女が恋しく思えてならなくなった。

きつかけは、昨日彼女の祖父、溪舟に呼ばれたことだった。萩村の部屋を出た後で、どんよりとした雨雲を背景に楓が雨に濡れているのを眺めながら廊下を歩いていたとき、「ああ、よかった、ここにいた」と幸子に声を掛けられた。何の用かと聞けば、溪舟から部屋に呼ぶよう言いつかつたというのである。

「あんた、何やらかしたの？」

と人聞きの悪い事を聞くので、

「やらかしてないよ」

と答えたが、呼ばれる理由が分からなかったのも事実だった。不安を抱きつつ溪舟の部屋へ行く時、そこでは溪舟が、いつものようにどこか疲れた様子で椅子に深く身を預けていた。明彦が部屋に入り、来た事を教えると、「すまんが、肩揉んでくれんか」と言った。

はあ、と曖昧に頷きながら、明彦は溪舟の背中

に回りできるだけ丁寧な肩を揉んだ。何しろ相手は生きていく文化財のような人である。そういう意識も手伝って、その肩は何か繊細な陶器のように、丁寧に扱わなければすぐに壊れてしまうように明彦には感じられた。

「あんた、上手いな。ええ気持ちや」

明彦が揉み始めると溪舟は目を閉じてそう言った。

「どうも——」

と頭を下げて明彦は揉み続けた。その後はしばらく沈黙が続いた。やがて溪舟が口を開いた。

「美佐子を静也のところに行かせたんはな、あんたとこうやって話がしたかったからや」

「はあ」

「ここはどうや」

この家の居心地を聞いているのだと思った。

「とてもいいですね。最初に来た時には庭の美しさにびっくりしました」

「嬉しいな。ここは儂の終（つい）の棲家や。それももう長いことやないな」

「そんな事言っつはいけません。萩む：静也君も、



美佐子さんも、俺から見ても、なんかすぐくお祖父さんを大切に思ってるなって感じがしますから」  
そう言うのと、溪舟の口元に枯葉のような笑みが薄く浮かんだ。

「儂にはな、死んだあれらの親のほかには、三人の子がおったんや」

「はい、知ってます。なんか、前に喧嘩をしたとかしないとか」

「静也から聞いたんやな」

「はい」

「血縁言うても、寂しいもんや。子供らは親を欲の目でしか見やせん。いつからああなつてしもたんやろな。みんな、儂から離れて行った。儂に残った肉親は、今や静也だけや」

「え？」

美佐子の名がないのが気になった。明彦の戸惑いをよそに、溪舟は自嘲気味に笑いながら、

「さしずめ儂は、リア王やな」

と呟いた。

「なら、コーデリアは、美佐子さんですね」

と明彦が言ったのは、溪舟に対して、誰か忘れ

ていませんか、という多少の非難の気持ちを含めての事だった。溪舟は、ん？と身じろぎしてから、ふふと小さく笑いを零し、それからこう言った。  
「あんた、上手い事言うな。そうや、美佐子はコーデリアや。せやけど、儂の肉親やない」

「そんな——」

思わず手を止めた明彦の手に、溪舟がその手を静かに重ねてきた。最初は肩もみが続けるよう促しているのかと思つたが、すぐに明彦は、この老人はそうやって手を取って、自分に何か大事なことを伝えようとしているのだと理解した。

「まあ聞くんや。あんたに聞いて欲しいんや」

そう言うって溪舟は、明彦の手を握つた手に少し力を入れながら、また話を続けた。

「儂がその事を思い知つたのは、あれの両親が死んだときや。あれは、宗泰と梓、あれらの両親と、美佐子と静也、四人で家族旅行に行った帰りやつた。高速でな、事故に巻き込まれてな、その事故で宗泰と梓は命を落とした。静也も、命こそ失わずに済んだが、左足をやられてな、一生元には戻らん言われた。美佐子だけが、奇跡的にかすり傷

だけで無事やった。あの日、両親を亡くして泣いていた美佐子に向かつてな、あのとき儂は、こう言つたんや。なぜ、血も繋がつたらんお前だけが——その日からや、あの子が、儂に一切我儘を言わんようになったんは」

明彦は胸に痛みを感じた。重ねられたその冷たい手から、この老人の中の悲哀が流れ込んでくるような気がして、ひどくいたたまれない気持ちになった。

しばらく押し黙つた後で、ようやく明彦は、  
「何故、そんな話を俺に？」

と溪舟に尋ねた。溪舟はそれに答えて、

「あんたにな、頼みがあるんや」

「頼み？」

「あの子をな、美佐子を、嫁にしてはてくれんか」

「は、はあつ？」

絶句する明彦をよそに、溪舟の言葉はあくまで静かで、

「儂は、あの子に頼りつきりや。今の儂はあの子の支えなしには成り立たん。けどな、それも皆、儂が昔あの子に負わせてしまったもんがあの子

を強いてるんやないかと思えば、儂がて心が痛む。あの子は、いつまでもここにおるべきやないんや」  
「だ、だけど、どうしてそれが……つまり俺……なんですか？……」

「あんたは、静也の友達や。あの気難しい静也が、あんたにはよう心を開いとる。きつとあんたは、ええ人間なんやろ」

「そんなことは……」

「なに、今すぐどうこういう話やない。将来の話や。考えといてくれんか」

「……………」

返事もできず、頭が真っ白になったまま、ただ鼓動だけは激しく波打っていた。結局その夜は一睡もできず、そして今日再び昨日の溪舟の話を思い出すと、苦しいほどに心臓が胸を叩き始めるのを、明彦には止めようがなかった。

池のおもてにほの暗く揺れている自分の影をぼんやりと眺めながら、明彦は思った。

——あの老人は、どこまで本気なのだろう。

しかし、本当に大事な事は、そこではなかった。  
——俺は、あの人に恋をしている。

この胸の疼き、昨日溪舟にそれを言われた時のあの痺れるような幸福感、その姿を思い浮かべただけで体内の隅々にまでアドレナリンが分泌されてくるようなこの感じ、それらは全て、自分の中に知らないうちに大きく育っていたその想いのせいであつた事に、ようやく明彦は思い至つた。

——そうだ、考えてみれば最初のあのときから、俺はあの人の姿に魅了されていた。なぜ気が付かなかったのだろう。彼女をそばに見るたび、彼女と言葉を交わすたび、俺はいつもあんなにも嬉しかったじゃないか。

「美佐子さん……」

「あの……」

眩いたのと声を掛けられたのは同時だつた。

ぎよつとして振り返ると、果たしてそこに美佐子がいた。あまりの驚きに明彦は飛び上がり、飛び上がった拍子にそのまま池の中に尻から落ちた。

高価な錦鯉が近くを泳いでいて、明彦は肝を冷やした。

「うわあつ！鯉がああつ！一千万がああつ！うわあつ！」

「お、落ち着いてください！そんなにしませんから！安いですから！ほんとに大丈夫ですから！」

「——」

ひとしきり騒いだ後で、愕然と明彦は池端の美佐子を見上げた。美佐子は池の中ですつかり固まっている明彦に、

「怪我はないですか？」

と尋ね、手を差し伸べた。

「す、すいません……」

明彦は躊躇いながらも美佐子の手を取り、引き上げてもらった。

「びしょ濡れですね。着替えを用意しますから、こっちへいらしてください」

「はあ」

美佐子にかなりみつももないところを見られ、明彦はいたたまれない気持ちを抱きながらその後についていった。

「祖父の言つた事です——」

母屋に向かいながら、美佐子が明彦に話しかけてきた。え？と、俯いていた明彦は咄嗟に顔を上げたが、美佐子は少し前を歩いていたので、その

背中しか見なかった。

「昨日、お祖父さんが関さんに言った事なんです  
が……」

心臓の音が、はっきり聞こえた気がした。

「俺も、その、あなたが——」

好きだと打ち明ける前に、美佐子が言った。

「本気にしないでくださいね」

「——え？」

「近頃のお祖父さん、みんなに言うんです、ああ  
いう事を。ほんと、お祖父さんにも困ったもので  
すね」

「みんなに？」

「ええ。私と近い年齢の男性がうちに訪ねてくる  
と、何かの発作みたいのが起こるみたい。最近  
は昨日の事もお忘れになる事も多くて、私も少し  
心配しているのですが……」

「はあ」

身体から力が抜けてくる思いがした。

「本当にごめんなさい。関さんも困ってしまいました  
でしょう？昨日の事は、どうか忘れてくださいね」

「困るとか……むしろ、俺は——」

と明彦が言いかけた時、

「関さん」

と、美佐子が少し声を大きくした。

「明日は弟が駅までお送りすると言っていますし  
た。折角来てもらったのに、最後は熱を出してし  
まって申しわけなかったとも。私からもお詫びし  
ます。本当にごめんなさいね」

明彦は立ち止まった。

美佐子は振り返った。

「どうしました？」

「ちよつと、外を歩いてみます」

「でも、濡れたままでは——」

「平気です、このくらい。それでは——」

一礼し、あとは美佐子の前から逃げるように駆  
け出した。

ともかく、昨日から頭や心がさんざん掻き乱さ  
れて、今はまともに思考することが難しいと感じ  
られたから、走って、疲れて、そうやって無理に  
でも気持ちを落ち着かせようとした。やがて足を  
止めると、いつの間にか目の前には向日葵畑が広  
がっていた。

ああ、そうだ。ここはこっちに来て初めて迎えた朝に、彼女に連れきたもらった場所だ。

明彦はぐつしより濡れたシャツを脱ぎ、夏の光をいっぱい受けとめるように大きく両手を広げながら、その汗にまみれた裸の上半身を、さんと降り注ぐ夏の強烈な光の中に晒してみた。

——俺は、美佐子さんが好きだ！

この青春の象徴（シンボル）のような元気な明るい姿をした向日葵達に向かつて、明彦は今を声をいっばいにしてそう叫びたい気持ちに駆られた。そして、そういう気持ちの中から、やがて爽やかな勇気が少しずつ身の内に芽生えてくるのを、明彦は感じた。

### 第3章

1

静岡といっても、東京から三島まで新幹線なら一時間もかからなかった。車両がホームに入ると葉月は「なんかあつという間だったな」と言った。葉月にとつては中学の修学旅行以来の新幹線だったが、降りるときにはぜんぜん物足りないと言った。顔をした。駅舎を出るとすっかり秋めいた涼しい風が明彦達を迎えた。葉月は秋の空気を胸いっぱい吸い込むように大きく伸びをしてこう言った。

「ドツキドキだなあ。萩村静也って、どんな感じの人なんだろう」

「本人の前では絶対に呼び捨てにするなよ」

「あつたり前でしょ。私を何だと思ってるのよ」

「お前ならやりかねん」

葉月がむっとした顔をしたとき、駅前に停まっていたグレーのセダンのドアが開いて、中から一人の青年が出てきた。青年は明彦達に向かつて真つすぐに近づいてきて、そして二人の前で足を止めると、関さんですか？と尋ねてきた。

「ええ。——ああ、君が萩村の」

「はい。息子の樹（いつき）です。父からお二人

をお迎えするよう言いつかってきました」

萩村の子か、と思いなながら、明彦は青年をしみじみと眺めた。昔の萩村にそっくりに思えた。つまり、相当な美青年だった。葉月の様子を窺えば、案の定、その樹を、背後にいつぱい花を描き込んでいるかのような目で見ていた。

「初めまして。関です」

と握手をしてから、こちらは姪の葉月ですと明彦が紹介すると、

「初めまして、葉月さん」

と、樹は葉月にも握手の手を差し出した。

「は、初めまして」

と、顔を真っ赤にしておずおずとその手を握った葉月は、ふわりとした溜息を洩らした。

樹に招かれ後部座席に葉月と並んで座る。樹が運転席に乗り込む。車が動き出す。窓の外を街並みが流れていく。

最初こそ葉月も、頭の上に猫を何匹も被った様子で、日頃はあまり目にできない姿、つまり可愛らしくぽっと頬を染めながらもじもじとした様子で隣で大人しくしていたが、そういう猫はすぐ

に落としてしまうところがこの姪っ子のいいところなのか悪いところなのか、客を退屈させまいとする樹の気遣いなのだろう、この付近の観光案内がてら、市町村合併で今は修善寺町がなくなつたことや、そもそもその町の名の由来となつた修禪寺の開基からその変遷などいかに葉月の好きそうな話をし始めると、途端に葉月は瞳を輝かせてそれに食いついた。樹もその辺りの話にはずいぶん明るい見えて、楽しそうに歴史を巡るやり取りに花を咲かせている二人を明彦は微笑ましく眺めたあとで、何気なく窓の外に目をやった。こうして窓の外を街が流れていく様子を眺めていると、昔のことがどうしても思い出されてくる。あの頃に比べればずいぶんと畑は減り、その分ずいぶんと建物が増えたようにも感じられたが、それでもその流れ去る風景の中に否応なく感じられてくる懐かしさには変わりがない。萩村の車に乗って、確かにあの日もこの道を通つた覚えが、明彦にはあった。そして、帰日も彼の車で……

——そうだ、考えてみればあれが、俺が萩村を見た最後だったんだな。

不意に明彦はそのことに気が付き、そして、一寸先は闇とは言うが、本当に人間というのは先の事が分からないものだ、その事を今更ながらに実感した。

三十年前のあの夏、明彦は、修善寺の萩村の家に一週間ほど滞在したのだった。萩村は夏休みいっぱいはそのにいる予定であったので、帰りは修善寺駅まで車で送ってもらう事になった。

東京へ帰るその朝、美佐子は外まで見送りに出てくれた。竹と楓に挟まれたその小径に佇んで静かに手を振る彼女の姿が見えなくなるまで見届けたあと、明彦は萩村に、思い切って美佐子を好きになった事を打ち明けた。萩村に驚く様子は全くなかった。むしろ知らないでも思っていたのかと笑われた。明彦の素振りを見れば誰でもすぐに分かる事だと言うのである。

「そんなに見え見えだったか？俺……」  
と恐る恐る聞く明彦に、萩村は「ああ」とあっさり一言で回答を済ませた。

「美佐子さんにも、分かってしまってるかな？」

「さあな。姉さんは、その辺は鈍いところがあるからな」

それからしばらく黙ったあとで、意を決したように明彦は眦（まなじり）を上げ、そして宣誓するように、萩村に言った。

「俺、東京に帰ったら、美佐子さんに手紙を書くと思う。俺の気持ち、彼女に伝えたいんだ」

「姉さんにラブレターを？」

「いや、ラブレターっていうか……」

「違うのか？」

「いや、ラブレターだ。うん、あの人に俺はラブレターを書く。だから、それまでは、この事は黙ってほしい……」

「構わんよ」

「あっさり言うな。お前は、その、許してくれるのか？」

「許すって何を？」

「だから、俺がお前の姉さんと付き合うことを」

と明彦が言った途端に萩村は吹き出した。

「こいつ、もうOKもらった気でいやがる」

と萩村に言われ、瞬時きよんとしてから明彦

も苦笑した。

「それもそうか。ともかく、許してくれるんだな」  
「俺が許さなければ諦めるのか？ 弟に反対されたくらいで諦めるっていうなら、そんな薄っぺらな男にちよつかいを出してほしくはないな」

「そうは言うが、お前と口で争って、勝てる気せんからなあ」

「ハッ、それはそうだ！」

萩村は今度は愉快そうに声に出して笑った。

ほどなく車は修善寺駅についた。車から降りるとき、萩村が美佐子の好きな花を教えてくれた。明彦はてつきり向日葵だと思っていたのだが、萩村が明彦に教えた花はアイリスだった。押し花にでもして送ってやればいいと言う萩村の言葉に感動とも感謝ともつかない感情を覚えながら、きつとそうすると明彦は答え、萩村の車が去っていくのを手を振って見送った。

明彦が美佐子への手紙をようやく書き終えたのは、東京に戻ってから一週間以上が過ぎての事であった。実は手紙は帰ってからすぐに書き始めたのだが、何度も書き直しているうちにそれだけ

の時間が経ってしまっていたのだった。萩村のアドバイスに従って、花屋でアイリスを一輪買って、押し花を作ってみた。最初はそれに何か気の利いたセリフを書こうとしたが、気障に思えたし、気障な男と思われるのも嫌だったので、悩んだ末に何も書かずに手紙に添えるだけにした。手紙を投函したその夜は、返事をあれこれ夢想して一睡もできなかった。そうして胸の灼熱するような想いを抱きながら、しかしそれも、一週間が経ち、やがて二週間が経つうちに、次第に消えていった。代わりに胸に込み上げてきたのは、哀しみと焦燥の入り混じったような暗澹とした想いであった。こうして無視をされるくらいなら、いっそ拒絶された方がましに思えた。萩村に電話をしようとも思ったが、電話口に美佐子が出てきたとき彼女とまともに会話ができる自信は明彦にはなかった。いや、それ以前に萩村に電話して一体彼に何を話すと言うのか。それとなく美佐子の気持ちを探ってほしいとでも言うのか、それとも手紙で申し込んだ事の返事を聞いて欲しいとでも頼むのか。どちらにしてもそんな事を萩村に頼むのは嫌だっ



たし、そういう裏から手を回すようなやり方は美佐子に失礼だとも思った。とはいえ、美佐子からの返事はいつこうに届かなかった。

思い余って、とうとう明彦は再び修善寺の萩村の家へ行く事にした。

その前日、明彦は覚悟を決めて萩村の家へ電話を掛けてみた。運よく電話に出たのは幸子だった。明彦は萩村を呼んでくれるように頼んだ。しばらくして電話に出た萩村に、明彦は明日そちらに行くと言った。萩村は少し声を暗くして、そうか、と言ってから、こう続けた。

「友達だからあらかじめ言っておくが、姉さんの事は、あまり期待しない方がいい」

その言葉で、明彦はようやく美佐子の気持ちを知ることができた気がした。それでも、一度火がついてしまった想いは簡単には収まってくれず、自分を納得させるためにも、拒否されるなら拒否されるでもかく美佐子から直接その答えが聞きたかった。だから、ともかく明日そちらに行く」と明彦は萩村に告げ、受話器を置いた。

しかしその日訪ねた先で明彦が遭遇したのは、

思ってもみなかったほどの、美佐子の強い拒絶であった。

まず彼女は、明彦の目の前で玄関の戸を閉め、そのままその戸を決して開けてはくれなかった。彼女はすりガラスの向こうにほんのりと淡く影を揺らしながら、あのような手紙を読まされたからには、もうあなたに会うわけにはいかない」と明彦に言った。

「すいません。急にあんな手紙を送って。ただ、好きになっただんです、あなたの事が。その気持ちをおあなたに伝えたかった。あなたにとつて迷惑だったのなら、謝ります」

「ええ、迷惑でした」  
それに対する美佐子の返事は、この間の彼女とは別人ではないかと思うほどに、冷たく刺々しいものだった。

「私、正直言って、最初からあなたの事がどうしても好きになれませんでした。弟のお友達でなければ、本当は口を利くのも嫌でしたわ」

「——え？」

その一瞬に、明彦は奈落に落ちていくような感

覺を味わった。

「きつとあの日にお祖父さんが仰ったことを真に受けてしまったのでしようけど。そのことは何度でも謝ります。でも、私は忘れてくださいって言いましたよね。手紙を読んで、私呆れてしまいました。本当に、なんて軽薄な人なんだろうって。私をどうにでも自由になる女だと思いました？こんな片田舎に引つ込んでるような女なら、どうとも思い通りになると思いました？馬鹿にしないでください」

「ち、違う！」と、思わず明彦は、高ぶった気持ちをぶつけるようにガラス戸にしがみついて、「ただ俺は、自分の気持ちをあなたに正直に伝えなかった。それだけなんです！それであなたに拒絶されるなら、仕方がないです。嫌われているなら、仕方ないです。だけど、あなたを馬鹿にしているとか、そんな気持ち、俺の中にはこれっぽっちだって！どうか、その事だけは――」

この時点ですでに美佐子からの愛を得る望みは完全に断たれていたが、それでもこの誤解を受けたままここを立ち去るのは、明彦にはどうして

も耐え難いことだった。必死の思いで美佐子に向かつて叫んだ明彦の声は、次第に涙声になり、それもやがて嗚咽に掠れ、最後には言葉にさえならなくなった。せめて彼女が自分の言葉を信じてくれたら、その上でならこの拒絶も素直に受け入れようと彼は願ったが、磨りガラスの向こうから聞こえてくる美佐子の声はあくまで冷ややかで、「いいから帰ってください。もう私からお話することは何もありませんから。それと、弟には、今後はあなたをここには連れてこないようきつく言っておきました。私、もうあなたとはお会いしたくないですから」

その言葉を最後に、美佐子は玄関先から立ち去った。

昨日の萩村との電話でふられることは十分覚悟して来たはずだったが、ここまでの拒絶を美佐子から示されるといふのは、彼の覚悟を遥かに超えていた。明彦は心を砕かれたような思いで閉ざされた玄関の前に座り込んだまま、しばらくは立ち上がることもできなかつた。そして、あんな手紙は出すべきではなかつた、ただ想っていただけ

なら、彼女が自分に對して抱いていたこれほどの嫌悪を知らずに済んだと、強い後悔を引きずりながら、あまりに惨めであったので萩村にも会わずに、深い傷心を抱えたまま東京に帰っていった。

やがて夏休みが終わり学校が始まったが、キャンパスで萩村の姿を見かける事はなかった。共通の知人から、萩村がこの秋から京都の大学に転学したという話を聞き、明彦は驚いた。話の真偽を確かめたかったが、萩村の下宿先は電話が繋がらないし、かといって美佐子のいる家へ電話をかけるのは、その頃の彼には絶対に不可能だった。そうしているうち、逆に萩村の方から手紙が届いた。やはり、萩村は転学していた。亡くなった父親と親交のあった国文学の教授から以前から転学を薦められていたというのであった。自分の望む勉強のためにはその教授の下で学ぶのがよいと決断したと、手紙にはそんな事が綴られていた。明彦の事にも触れられていて、美佐子のあれほどの拒絶は予想していなかった事や、力になれず申し訳なく思っている事などを書いていたが、その事と彼が転学を決めた事はまったく関係がない

とわざわざ書いていた事が、逆に明彦に、今度の事が、おそらく悩んでいたのだらう萩村の決断のための最後の一押しをしたのだということを悟らせた。明彦は萩村に怒りを覚えた。それは萩村の自分に対する憐憫に思えたからだだった。転学に際し自分に一言の話もなかったことも相まって、何か萩村にまで裏切られたような気持ちになり、丸めた手紙に怒りをぶつけて壁に叩きつけたあとは、ひどく寂しい気持ちになって、部屋の中に大の字に寝転がったまま、目の奥が次第に熱くなってくるのに任せて目尻から涙が流れてくるのを、そのままに放っておいた。

やがて春になった。

明彦は、久しぶりに萩村に手紙を書いた。

その手紙で明彦はアメリカカ留学が本決まりになったことや、これからは話をしたくなっても物理的にそれが不可能になるので最後にこうして手紙を出すことにしたと、手紙を書いた理由を言い訳のように書き綴ったが、萩村への最後の手紙となったそれは、本当に大した内容の手紙ではなくて、去年の出来事には一切触れずに最近行つた

釣りの話や、最近見たテレビドラマの事などを指が動くに任せて書いただけのものだった。今から考えれば、そうして手紙を書いたのはこのまま萩村との縁が切れてしまう事に心のどこかで未練を感じていたためだったかもしれない。しかしその手紙に対する萩村からの返事はなかった。

あれから三十年が過ぎた。

時は全てを癒してくれる。あの頃は、あまりの悲嘆に死にたいと思つた事さえあつたのに、そういう自分の青さをも含めて、今は明彦には、あの頃の全てが懐かしく感じられた。

「葉月さんは、なかなか物知りなんですわね」

と、樹が話しかけてきた。

「ええ。昔からその子はその手の話には滅法強いんです。私など、足元にも及ばないくらいですよ」

「へえ、そうなんですか。すごいな」

「い、いえ。そんなことないですよ。やだな、

叔父さんつたらあ」

「なのに、なぜか英語とかはいつも赤点ぎりぎりなんですが……」

「うっさい！」

思わず叫んで葉月は口を押えた。

樹がくすりと笑つた。

車は修善寺駅の近くを通りすぎた。

## 2

車を邸の門の前につけると、樹は明彦と葉月を一旦そこで降ろし、車を車庫に運んでくるので先に行つて欲しいと言つて再び車を走らせた。あの日の萩村と同じだった。車から降りると、葉月が「うわあ」と声を上げた。明彦もその小径を眺めて、その美しさに、少し酔うような気持ちになつた。

片側にはこの邸の白壁の上から枝を垂らした無数の楓が、錦繡を織り込んだようなその鮮やかな緋色を一面に鏤め、小径のもう一方の側の竹林のその目に沁みるような緑との素晴らしい対象をなして、それが先の方まで続いていた。そうだ、あの夏の日、秋になつてからもう一度ここに來てみたいと思つたのだ。ようやく叶つたな、と、そう思いながら、明彦は見とれている葉月を促して

門の中に入っていた。

きれいだね、すごいね、と葉月は、一足ごとに感嘆の声を上げた。門を入るとそこは紅葉がいっぱいだった。種類が違うのか枯れ具合の違いなのか、同じ楓といつても微妙に色合いの異なる赤が複雑に入り混じりながら、庭全体を彩り豊かに染め上げていた。その森閑とした秋の景色に包まれながら、明彦は、ここだけ時が止まっていたかのようだ、と思った。時が過ぎ去り、自分も含め様々なものが変わっていった中で、あの日は爽やかな緑色に輝いていたその葉の色を除けば、ここは何もかもが昔のままのような気がした。紅葉の作る網目状の木陰の落ちた玉砂利の小径を歩いていくと、三段の階段の上に、片手に杖を持った男がひっそりと立っていた。髪はすでに半分ほどが白くなっていて、目尻の辺りにも皺が深く刻みつけられていたが、その男が萩村であることは、明彦は一目で分かった。

「車の音が聞こえたものでな」

と萩村が言った。

「昔は、杖などついてなかったろ」

それに対し、明彦はそう返した。

「数年前から、やたら古傷が痛み出してな」

「そうか」

「うん」

三十年ぶりに再会した二人は、そういったちぐはぐな会話を交わしながら、お互いに相手にかけるべき言葉を、そうして探しあつていた。

「萩村先生ですわね！」

ふと会話が途切れたところで、葉月が萩村の前に走り込んだ。背負っていたリュックからさつと本を取り出すや、

「サインをお願いします！」

と言って、以前萩村が著した例の後鳥羽上皇の本を両手で差し出した。

思わず明彦は、葉月の頭の後ろをパシんと平手ではたいた。

「痛い」

と頭を押さえる葉月に、

「初対面でいきなりサインをねだる奴があるか！」

「だって」

「いいよ」

萩村は表情を緩め、葉月から本とサインペンを受け取りさりと書いた。

「実は、友達からも一冊頼まれてて……」

「お前いい加減に——」

と叱ろうとする明彦を、萩村は制して、

「私は一向に構わない。もう一冊でいいのかな」

「はい！」

二冊の本にサインをもらった葉月は、ありがとうございます！と、直角になるまで深く頭を下げて、それらを大切そうにリュックに仕舞った。

「すまんな」

と明彦は苦笑混じりに言った。

「いや」

と微笑みながら、萩村は明彦たちを招くように踵を返して先を歩き始めた。

「優しい子だな」

と、明彦と並んで歩きながら、萩村が小さくそう言った。

「あの子に氣遣ってもらったようだ」

明彦は、少し後ろを歩いている葉月をちらと一

瞥してから、

「なに、本当にお前のサインが欲しかっただけだ。友達に自慢になるとか言っていた」

「それでも俺は救われた。今日お前が来ると思い、実を言えばさつきまで手が震えていた」

「なんだそれは？」

「そのことは、追々話す」

明彦は不審に思ったが、後で話すと言う萩村の言葉を信じて今はそれ以上聞くのをやめた。そうこうするうちに母屋の前まで来た。玄関先では萩村の妻の由美子が明彦達を出迎えた。愛嬌のあるとても明るい雰囲気の女性であった。お世話になりますと言って、東京駅で購入した雷おこしを手渡すと、これは萩村の好物だと言った。

「やっぱりお友達ですね。よく知ってらっしゃる。それで、こちらの可愛い方が、葉月さんですね」

「こんにちは。叔父さんに無理言っついてきちゃいました。よろしくお願いします」

「こちらこそ。さ、さ、お上がりになつて」

この会話の間に、彼女は客用のスリッパを用意し、夫から杖を受け取り、コートを畳んで腕に提

げ、それから葉月に向かつて、頂き物のケーキがあるから一緒に食べましょうと言った。ありがとうございまずと葉月が元気に答えたので、由美子は葉月を部屋に案内した。萩村は明彦を別の部屋へ連れて行った。通されたのは線香の香りが馥郁とした八畳の和室であった。がらんとしたその部屋の中に、黒檀の仏壇のみが一際目立っていた。「線香をあげてくれないか」

と萩村が言った。仏壇の前に歩みを進めると、遺影の中に、年を経て年齢を刻んだ美佐子の姿があった。煙のくゆる線香をそつと前香炉にさし、手を合わせてみる。瞑目すると、三十年前の夏の日が、闇の中に灯し火のように浮かんでくるようであった。やがて明彦は、合掌を解きながら、「癌だったそうだな」

と言った。

こうして、美佐子が死んだという事実を見つめ、その喪失を思うと、何かしんみりとしたものが胸の底に降りてくるような感じがした。それを哀しみとして受け止めるには、生前の彼女との関わりがあまりに薄すぎた気もしたが、それでも彼女が

失われたというその感覚は、どこまでも哀しみに酷似して切なかった。

「それにしても、年を取ったな」

しばらく遺影を見つめて、それから明彦は、しみみとそう言った。

「享年五十四。いつまでも二十代ではない。俺も、お前もな」

「それはそうだ。だが、いい写真だな。彼女は美しく年を取った」

「お前にそう言ってもらえれば、姉も泉下で喜んでいられるだろう」

「馬鹿を言え。俺が何を思おうが、この人が何を喜ぶっていうんだ。昔の事を知ってるくせにからかうな」

そこまで言ったとき、突然明彦は、その部屋がどこであったかという事に気が付いた。

「ここ、昔絵があった部屋じゃないか？」

すると萩村は、どこか苦々しい笑みを、口の端に浮かべた。

「お前の記憶力はすごいな。そうだ、ここは昔、あの山椒大夫の連作が飾られていた部屋だ」

「絵はどうした。別の場所に移したのか？」

明彦が聞くと、萩村は、いや、と首を振った。

「この家の中には、祖父溪舟の絵は、もう一枚もないんだ」

「え？」

そこへ突然襖が開いて

「叔父さん！」

と葉月が飛び込んできた。

「あ、ごめんなさい！何か、大事なお話の最中でした？」

「いや、いい。どうした？」

「樹さんが、修禅寺の周辺を案内してくるって言うの。叔父さんの許可があればって言うんだけど、連れてってもらってもいいかな？」

「ああ。だがくれぐれも樹君に迷惑をかけるなよ。くれぐれもだ」

「叔父さんはいつも一言多い！」

葉月は明彦にあかんべえをしかけたが、そこに萩村がいるのに気づき、にっこりと会釈すると、またばたばたと出ていった。遠くから「樹さあん、叔父さんが行ってもいいって」という葉月の声が

聞こえてきた。

「すまん、毎度騒がしい姪で」

「いや」

と笑って首を振った萩村は、不意に寂しい顔になって、

「少し庭を歩いてみないか」

と明彦に言った。

### 3

庭に出た二人は、燃えるような紅葉の下を歩いていった。木々はどれもが秋色に彩なされ、美しいと言えはこの上ないものであったが、あの日に見た盛夏の中の青葉のような生命の力強さはそこでは乏しく、やがて枯れ落ちる時を待っているかのような静謐の中で今はどの葉も皆赤く染まって微かに風に揺れていた。足元に散らばった様々な色彩の落ち葉を踏みながら歩いているうちに、いつの間にか明彦は萩村とともに池の辺りに来ていた。途中で萩村が話してくれた通りに、すでに池の水は抜かれていて、中はただ紅葉が



みつしりと底を埋めているだけだった。

この池にいた鯉達も、あの家にあつた数々の絵も、溪舟が失明前から集めていた骨董品の類も、この邸にあつた僅かでも値打のあつたものは、溪舟の死とともに親戚達が全て持ち去つたのとであつた。

溪舟がこの世を去つたのは、二十年ほど前のことであつたという。生前、溪舟は懇意にしていた弁護士に遺言書を預けていた。死後にその弁護士立ち合いの許で遺言書が開封されたが、その内容は萩村の叔父や叔母達を激怒させた。溪舟は、叔父達への遺留分等を除いた法律が許す限りの財産の全てを、美佐子に相続させようとしていたのである。それはずつとこの家に縛り付けてしまつた美佐子への侘びの気持ちもあつただろうが、同時に叔父達への遺恨の気持ちも多少は溪舟にあつたのだろう。しかしこれに怒つた叔父達は、まず弁護士にその遺言書の無効を主張した。とはいえ、それは法的にはどう足掻いても有効なものだつた。そこで彼らは、今度は美佐子に対して相続放棄を迫つた。元々連れ子に過ぎない彼女には

溪舟の財産を相続する資格などない、母親ともども拾つて貰つただけありがたく思うべきだ、などと、萩村にとつては今思い出しただけでも怒りがこみあげてくるような言葉が次々に親戚達の口から美佐子に浴びせられた。美佐子の性格から彼らの言いなりに相続を放棄してしまうのではないかと萩村は案じたが、彼女は放棄だけは頑なに拒否した。それでは祖父から受け継ぐものの全てを失つてしまうことになるからだつた。美佐子は彼らの言い分は認めながら、ただ、この家だけはこれからも自分に守らせてほしいと、親戚達の前で手をつけてそう懇願した。そのため、この家と、この家を当面維持していくことができるくらいに財産は美佐子にもかろうじて残された。とはいへそれは溪舟が美佐子に渡そうと望んでいたものからすればほんの僅かなものに過ぎなかつた。

「人間というのは、なるうと思えばどこまででも浅ましくなれるものだ」

紅葉に埋もれた池のほとりを歩きながら、萩村が静かな口調でそう言つた。

「それを抑えるのが恥だが、そういう恥じる心を

持たない人間は、むしろ強い。彼らに比べ、姉は弱い人間だった。あの罵詈雑言に、あの理不尽に、姉はひたすら沈黙し、そんな彼らの全てを、溜息を一つこぼすだけで許し、その結果として、ほんどのものを彼らに奪われた」

萩村の横を歩きながら、明彦は上の方に目を向けた。頭上を覆う紅葉の一枚一枚、その梢の一つ一つ、あれらを、美佐子は守ろうとしたというところか、と明彦は思った。その想いの底に、何があったのだろうと。

その後彼女は、萩村からの紹介で知己を得た出版社からの依頼を受けてフランス語の翻訳などをしながらこの家の中でひっそりと暮らし、そしてこの家の中で、先月その生涯を静かに閉じたということであった。

「結局、姉の一生は、ただ奪われ続けただけで終わった気が、俺にはしてならないよ」

と萩村が言った。明彦は足を止めた。萩村が少し先に行く。その背に向かって、明彦が言った。「お前はそれを、黙って見てたのか？ 親戚達が奪っていくのを、ただ黙って」

萩村も立ち止まり、そして明彦の方に僅かに顔を向けた。

「いや、責めているんじゃないんだ。そんな事でお前を責める資格も筋合いも俺にはない。ただ、お前らしくないって思ってたな」

「……」

萩村は答えなかった。

明彦はべつに萩村に答えを強いるつもりはなかったもので、それ以上何も言わずに枯れた池の前にしゃがみこむと、池の中の色とりどりの落ち葉が鮮やかな色彩を広げている様子を見つめた。

「こうして見てみると、枯れ池にもなかなかの風情があるものだな」

明彦がそう言うと、萩村も池端に立ってその中を見下ろした。明彦は、そうして枯れ池を見つめたまま、横に立った萩村にこう言った。

「奪われるなら、奪われるなりに、踏みつけにされるなら、踏みつけにされるなりに、そこにもやはり、姿の良し悪しというのはある。彼女の姿、振る舞い、その有り方、俺にはとても美しいものであったと感ぜられるよ」

「ただ奪われ続けただけの、女の一生がか」

「それは理念の話だ」

鋭く言つて、明彦は萩村を見上げた。

「賢いとか愚かとか、強いとか弱いとか、或いは正しいとか間違つてるとか、そういうのは、全部理念の側の話だ。そこに美しさが感じられるかどうかということとは、まったく関係がない」

そこまで言つたところで、明彦はその厳しい声を不意に和らげ、

「覚えてるか？昔、お前はそう言つて、俺に説教したことがある」

そう言われて、萩村も僅かに笑みを零し、

「ああ。覚えてる……」

と頷くと、池の向こう側の苔むした石の上に広がる紅葉に目をやりながらこう言つた。

「だがな、関。人間の中には、理念とも情緒とも違ふ、もつと醜い、感情という厄介なものもあるんだ」

「感情？」

と聞き返した明彦は、ふと萩村からの手紙を思い出した。

「そういえば、お前は妙な事を手紙に書いていたな。俺に対する複雑なものがどうか。あれは一体なんの事だ？」

「……………」

萩村はそれには答えず、代わり明彦に、まったく別のことを尋ねてきた。

「三十年前、姉は何と言つてお前を拒否したか、覚えてるか？」

思わず明彦は苦笑した。

「ああ。覚えてるよ。弟の友達でなければ、俺など口も利くのも嫌だったと。あのときは、本当にはつきりと言われたなあ」

「さっきの俺の話に、お前は違和感を感じなかったか？あの叔父達の理不尽な要求には抵抗らしい抵抗も見せずに諾々と従つた姉が、一方であのときのお前に対しては、ほとんど罵倒に近い言葉で追いつ返した。不思議だろ？」

「……………お前が何を言いたいかよく分らんが、そういう事なら、それだけ嫌われていたって事だろう。むしろあそこまではつきり言つてもらえたら、俺もすっぱり諦めがついた。そうでなければ

ば……。

ずっと後になって、俺はこうも思ったよ。それもまた、彼女の優しさだったのかもしれないってな。まあ、そうやって自分を慰めてただけなのかもしれないが」

「あれは、俺がそう言わせただんだ」  
「——え？」

思わず明彦は萩村を見上げた。

「お前から、姉に手紙を書くのと打ち明けられたあとで、俺は真っ直ぐに姉のところに行つてこう言つた。関が、姉さんに交際を申し込む気ではないよ。だが、決してそれを受けないで欲しいと。姉さんがいなくなつたらお祖父さんはどうなる。俺だって、このまま姉さんにはお祖父さんの所にいてもらわないと、好きな勉強が続けられない。大学を卒業したらいくらでも恩返しをするから、今は誰であれ男と付き合うような真似はしないでほしい。第一、関というのは優秀な男で、この先海外に留学するという話のある事も聞いている。でも姉さんがその申し出を受ければ、彼はきっと姉さんのために全てを捨ててしまふだろう。そう

なつたとき、彼の将来に対して姉さんは責任が持てるのか。——そこまで俺は言つた。無論、俺がそう言つたのは、決してお前を思つてのことではない。

——最後に姉は、俺にこう言つたよ。静也は何も心配しなくていいからと……」

「……………」

少し頭が混乱した。そのため、僅かでも頭を整理するための時間が明彦には必要だった。

しばらく沈黙した後で、ようやく明彦は、

「なぜ、そんなことを？」

と萩村に尋ねた。

「あれは、発作のようなものだった。何もお前がどうというのではない。だが、あの姉が、誰か別の男のものになる。そう想像すると、俺には、俺にはそれが——たまらなかつたんだ！」

叫ぶりなり、突然萩村は顔を両手で覆つて天を仰いだ。驚いて、明彦は慟哭するように声を震わせる萩村を呆然と見上げた。

「関、あの時の俺を、許してほしい。あの時の事を、後悔しなかつた日は一日もない。ずっと俺は、

姉さんにも、お前にも、こうして詫びたかったんだ！」

「……………」

明彦は無言で立ち上がり、震えている萩村の肩に、横からそつと手を置いた。萩村は、顔から手を放すと、その濡れた目を、足元に向けた。目を閉じると、数滴の涙が落ちていった。

「もう三十年も昔のことだ。今更許すも許さないもない。だが……」

そこまで言ってから、明彦は大きく嘆息し、そして、そうか、と静かに呟いた。

「好きだったんだな、お前も。美佐子さんのことが——」

明彦のその言葉に、萩村は頷いた。

「誰にも言えん想いだった」

「親戚達の横暴を黙って見ていたのも、その秘めた想いのゆえか」

「叔父や叔母達と言いつ争っていたとき、従妹の一人に、こう言われた。まるで恋人を庇ってるみたいだと。そう言われた後には、もう俺には、何も言えなくなつた。俺の姿は、外から見て、愛する

女のためにしている男のそれに見えてはいないか。そう思うと、俺にはそれが、たまらなく恐くなつた。それに、姉のために力を尽くそうとする事が、由美子や、生まれたばかりの樹に対し、何か裏切っているような気にさえなり、この秘密のせいで、もう俺には、何もできなくなつた」

「萩村、やつと分かつたよ。お前が俺をここに呼んだのは、それを話すためだったんだな」

頷いた萩村は、続けて明彦に、その心の内を、こう打ち明けた。

「この想いだけは、誰にも言わずに墓まで持つていくつもりだった。だが、姉が死んだとき、俺の中には強い後悔が残つた。結局俺は、姉さんに、何も詫びる事ができないまま、永遠に失つてしまった。だから、せめてお前に対してだけは、この後悔を残したくない、そう思った。今日、お前が来てくれて、本当によかつた……」

「……………」

そこまでの萩村の話も聞いても、まだ明彦の中には、理解のできない事も多く残つていた。そこに姉に対する秘めた想いがあつたにせよ、あの日

の事に、萩村がなぜそれほど悔いを感じているのかという事や、この家にそこまでこだわった美佐子の意志の底に、一体何があったのかという事や。しかし彼にはもうそれらを萩村に日々尋ねる気は起こらなかった。不思議は不思議として、そのままそこに置いておいた方がいい場合もある。ともあれ、萩村の中に自分への友情が昔のまま今も変わらず残っていたのを感じ、それが明彦には、今はただありがたく感じられていた。

「冷えてきたな。部屋に戻ろう」

と明彦が言うと、萩村は「そうだな」と頷いた。

帰り道を辿りながら、萩村が明彦に、さつきはすまなかったと言った。

「つい、取り乱した。みつともないところを見せてしまったな」

「いいさ。だが萩村、俺は思うんだが、もしかしたらお前は、大事なことを見落としているかもしれないぞ」

「なんのことだ？」

「さっきの話、本当にあれは秘密だったのか？由美子さんは、本当にそれを知らないのか？」

「当たり前だ。そんな話を女房にできるものか」  
「分からんぞ。秘密だと思っているのは亭主ばかり、女房殿はとっくにご存じだ。そういう話は、世間じゃさらに聞く。いや、もしかしたら美佐子さん自身、ずっと昔からお前の気持ちに気づいていたっていうことも……」

「恐ろしいことを言うな」

「まあ、実際のところはどうか知らんが、この世の中は、見えているものの裏側に途轍もない奥行きを隠しているものだ。今日は、それが知れてよかった」

「深淵だな。科学者から哲学者に転向したらどうだ」

「それもいいな」

「今日は泊まっていつてくれるんだろ」

「ああ。お言葉に甘えるよ。折角来たんだ。日帰りではもったいない」

そんな事を話しているうちに、二人はもう母屋の前まで来ていた。

美佐子の墓は、そこから車で十分ほどの距離にある浄土宗の寺の一角にひっそりと建っていた。萩村の案内で墓参りを済ませ、戻ったのは夕方になってからだ。樹と葉月はまだ帰ってきていなかった。二人が帰ってきたのはそれから少し経ってからだった。夕食は五人全員で一緒にとった。邸にはすでに使用人は一人も残っていない。今では庭の手入れも年に数回業者を呼んでやっているだけだという。それでも由美子の作ってくれた夕食はどことなく幸子の味を思い出させるものだった。話を聞けば幸子がここを辞めるまではここに來る度彼女に色々教えてもらっていたとのこと。ただ、溪舟の舌に合わせた幸子の京風の味付けに比べて、由美子の作った筑前煮はどちらかといえば関東の味に思えた。生まれを聞けば群馬だというので納得した。葉月達はいえ、結局源氏公園周辺だけで半日を費やしてしまっただけのことだった。本当は庭園を見に虹の郷まで足を延ばしてみたかったのだけど、と樹は笑った。その笑いの意味は想像がついた。昔から

葉月は興味のあるものに出くわすとその場から離れなくなってしまうところがあつたからである。それでも葉月の様子を見れば今日はとても楽しかったという顔をしている。もみじまつりのこの時期は夜にライトアップがされるので、樹と葉月の間で虹の郷には日が落ちてから行ってみようという話になっているらしい。食事が済むともう外はだいぶ暗くなっていた。樹と葉月は出かけていった。明彦と萩村は縁側に出て互いにビールを酌み交わしながら、それぞれの三十年を語り合つた。すっかり日も落ちて、見上げれば楓の葉も、今はただひたすら黒い。星は見えたが、銀河は見えなかった。その代わり月がやたらに明るかつた。今夜は満月だった。

酒の弱い萩村は、気が付くと柱に凭れて眠っていた。由美子はすっかり眠り込んだ夫を揺り動かして、奥で眠るように促してから、明彦にごめんさいねと言つて萩村に肩を貸した。

「お寒いでしょう。関さんももう奥にお入りになつたら？」

と言う由美子に、「もう少しだけここにいます」

と明彦は答えた。萩村が由美子に運ばれていくのを見送ってから、明彦は改めて夜の中に黒々と葉を繁らせている無数の楓を眺め渡した。

今日ここに来た時、時間が止まったようにここは変わらないと思った。しかし変わらないという事は、変わらせまいとする意志がそこにあったという事だ。全てのものは放っておけば変わっていくものだから。かつては不変と思われていた原子さえ、放射性崩壊によつて別の元素に変わつていくことは今や科学の常識となつていゝる。まして目に見える世界にあつては尚更だ。先ほど美佐子の墓に参つた帰りに萩村に頼んであの向日葵畑のあつた場所に行つてもらつたが、今はそこは住宅地になつていた。それが普通なのだと思ふ思うだとする、この家の昔と変わらないこの姿は、言わば美佐子の残した一つの想いの形であるとも言えまいか。

そんな事に思いを巡らせながら、瓶に残つたビールを空いたコップに注いでいると、庭先に影が伸びてきた。影の根元を辿つていくと、長身の樹の姿が、家の灯りに照らされてそこにあつた。

「やあ、樹君。今戻つたのですか?」

「いえ、帰つたのはずっと前です。部屋で葉月さんと話してました。僕が趣味で集めてる古書とかを葉月さんが見たがったので。でも、彼女も今日は疲れたようで、少しうとうとしてきた様子でしたので、今部屋まで送つてきたところですよ」

言いながら、樹は庭伝いに明彦に近づいてきて、その横に座つた。

「すいません。すっかり葉月が世話になつてしまつて」

「とんでもないです。僕の方が、葉月さんにはとても楽しい思いをさせていただきました」

そう言つてから、樹は少し躊躇うように明彦を見て、それから、言うか言うまいかと悩んでいるような様子を見せてから、ようやく明彦に、「あの、関さん……」と言葉を掛けた。

「はい。なんででしょう」

「その……不躰な事をお聞きしますが、今も、お独りだと伺いました」

「ええ。恥ずかしながら」

「もしかして、ずっと伯母を想い続けて?」



「いや」

と明彦は笑いながら、

「私はそこまで純粋な人間ではありません。あれから私も、何人かの女性と付き合いました。だが、その誰とも上手くいかなかった。別れを切り出すのはいつも相手の方でした。彼女達は、最後に決まって、同じ事を私に言いました。あなたは一体、誰を見ているの、と。自分でも気が付かないうちに、いつも私は相手に別の女性の面影を重ねて見ているようなのです。女の人というのは、男のそういうのが、分かるようなですね。まったく、女の勘というのは、馬鹿にならない」

「それを聞くと、僕にはやはり、残念でならない気がするんです。もつと早くに、あなたにはここに訪ねてきてほしかった」

「え？」

と明彦は首を傾げたが、樹は急に話を変えて、「小さい頃から、僕は伯母さんにとても大事にしてもらいました。僕はずっと京都住まいだったんですが、夏休みの度にここに来るのが、とても楽しみだった。伯母さんに会えるから。高校に上

がってからも、あの通り父は厳しい人だからよく喧嘩になったりするんですが、その度に、家を飛び出しては、新幹線に乗り込んでここまで来るんです。そういうときは、どんなに僕が父さんの悪口を並べても、伯母さんは絶対に父さんのことを悪くは言わない。ただ、いつも穏やかに僕の言うことを、最後まで聞いてくれたんです。それで翌日はすっきりした気分になって、父さんに素直に謝ることもできるようになったりしたものです。

——たぶん、伯母さんが亡くなったことを、僕は父さんよりも、深く悲しんでいる」

語りながら、樹の目にうつつすらと涙が浮かんだ。

「そうですか」

樹を見つめる明彦の瞳が、優しくなった。

樹は一つ涙を啜って、それから明彦に聞いた。

「ところで、関さんは式子（しよくし）内親王をご存じですか？」

「しよく……誰です？」

「式子内親王。平安末から鎌倉期にかけてを生き、中世の歌人です。幼少の折に加茂神社の齋院となつて以降、少女期から成年期にかけての十一年

を神域の内に過ごし、やがて病により退下したあともずっと御簾（みす）の内に暮らした、あの源平合戦の動乱の時代にあつて、そういうとても静かな生涯を送った人です。平家物語で有名な後白河上皇の皇女と言えば、分かりやすいでしょうか」「申し訳ない。葉月と違い私はその辺の話にはとんと疎くて。まあ、後白河上皇の名前くらいなら知っていますか」

「後世に優れた歌をたくさん残した人ですが、その中の一つに、このようなものがあります。

生きてもよ明日まで人はつらからじ。この夕ぐれをとばとへかし

——伯母は、亡くなる前の日に、ここでこうして庭を眺めながら、この歌を詠んでいました」

明彦は、強く興味が惹かれた。

「どういう意味なのです？」

「私の命はきつともう明日までもたない。だからせめて私が生きていろうちに、この夕暮れの中を訪ねてきてほしい。およそ、そのような意味の歌だと言われています」

「生きてもよ……」

哀しくて寂しい歌だと明彦は思った。

「君の伯母さんにも、そのように想う男性が、どこかにいたのでしょうか」

「はい。その人の話を、僕はその日、伯母から聞かせてもらいました」

「そうですか」

呟いた明彦の心の中に、昔の美佐子の姿が浮かんできた。

「幸せな男だ。だけど、馬鹿な男でもあるな。どうしてその男は、彼女のその想いを、受け止めてあげることができなかったのだろう」

「そのとき伯母が僕にしてくれた話を、関さん、聞いてくれますか？」

「もちろん。是非にも」

それは美佐子の死の前日、すなわち、先月の二十一日の事であったという。秋はまだ浅く、紅葉の色づき具合も半染めといった程度で、多くの梢に垂れ下がった葉もまだまだ青々としたところをだいぶ残していたが、その日の夕映えは見事に美しく、色づいた葉も青い葉も区別なくその真紅

の光で鮮やかに染め上げていた。美佐子の様子を見に部屋に向かった樹は、ちょうど今の明彦のよう縁側に座って庭を眺めている美佐子を見かけた。白い夜着が夕日に赤く染まっただけで、夕暮れ独特の濃く黒い影をその姿のところどころにくっきりと落としていた。彼女は近づいてくる樹に気づく様子もなく、ふと、小さな声で一首の和歌を口にした。その風のような微かな声が耳に届き、樹は足を止めた。そこで初めて美佐子は樹がそこにいるのに気が付いた様子だった。

「起きてて大丈夫なの？」

と言いながら、樹は美佐子の横に座った。

美佐子は樹を少し眩しそうに見てから、

「ええ。今日は気分がとてもいいの」

と答え、それからまた庭を見つめた。

「それに、夕焼けがこんなにきれいなもの」

その頃は、強い抗癌剤のために美佐子はすっかり髪をなくしていた。やつれたその顔に生気は乏しく、それはその鮮やかな夕焼けによってさえ隠しきれないものであったが、それでも樹の前で伯母はいつもの伯母のまま、その声はどこまでも優

しく樹を包み、それだけにいつそう樹を哀しい気持ちにさせた。こういうときには、いつも彼は努めて明るい声を出すことにしていた。

「今の、式子内親王の歌だよ」

樹がそう言うと、美佐子にはにかみながら、

「やだ、声に出たのね。恥ずかしいわ」

と微笑った。

「伯母さんにも、そんな風に待っている人が、誰かいるの？今、会いたいと思ってる人が」

「いないわよ、そんな……」

言いかけて、ふと美佐子は、遠い眼差しを庭の方に向けた。

「どうせもうそんなに長くないんだし、今更いちやんに嘘を言っても仕方ないわね」

「伯母さん」

「ふふ……。ごめんさい」

「もしかして、昔の恋人？」

樹にそう聞かれて、美佐子は少しの間彼女の思ひ出を見つめるように目を閉じ、それから静かに夕暮れの空を見上げた。

「ずっと昔ね、伯母さんがまだ若かったころ、私

もね、たった一度だけ、ラブレターをもらったことがあるのよ」

「へえ、そうなんだ」

「その人は、とてもいい人でした。細やかな気遣いのできる、春のような穏やかな気持ちを持った人。その頃、この近くには広い向日葵畑があったの。夏になると、黄色い元気な花が見渡す限りに広がって、私はその景色が大好きだった。その人も、その景色を、素敵だと言ってくれたわ。それが私には、何かとても嬉しくて。その人とお話をしたり、その人と一緒にいると、私はいつも、何かとても楽しくてね。でも、ああ、私はその人のこと、好きになってたんだなって気が付いたのは、その人からの交際の申し込みを、お断りした後のことでした」

「伯母さんの方から断ったの？」

「ええ。その頃の私には、たくさんのしがらみがあったから、その人の気持ちに伝えることができなかった。そんな勇気も持てなかった。そのことは、今でも仕方がなかったと思う。思うのだけれど、人間ってというのは、奇妙なものね。いつもは

人前で思っていることの半分も言えないのに、自分の気持ちを偽る時だけは、あそこまでのことが私にも言えるなんて。あのときのことを思い出すと、どうしてあんなことが言えたのかなって、今でも不思議に思うことがあるわ」

「一体何を言ったの？」

「あなたなんか嫌いだから、二度と私の前に姿を見せないで。そんな意味のことをね」

「驚きだな。伯母さんがそんなことを？」

「あの時は、必ず拒否しなければいけないと、その思いでいっぱいだった。でも、今から思えば、その人をそんな風に侮辱する必要まではなかったと思う。もし、叶うことなら、もう一度その人に会って、あの日のことを、謝りたい」

「今でも、その人のことが好きなの？」

「え？さあ、どうなのでしょうね。ただ、感謝はしています。何もなかった私の人生に、その人は、ささやかな彩りを添えてくれました。そうね。もし、もう一度その人に会えたなら、私にその人に掛けた言葉は、ごめんなさいではなくて、ありがとうの方かもしれないわね。どちらにしろ、そ

の人がここに訪ねてくることは、もう決してないのだけれど——」

樹の話聞くうちに、次第に明彦は、目に熱いものを感じてきた。それが耐えられないほどの熱さになったとき、その頬に一条の涙が伝った。

樹は明彦の涙に気づき、慌てたようにはたと話をやめ、

「すいません。僕は、関さんにそんな辛い思いをさせるつもりはなかったんです。ただ、伯母の話聞いて欲しくて……」

「いや」

と明彦は、一つ首を振り、

「人が泣くのは、何も辛い時だけではありません。寂しい時、哀しい時、悔しい時、心の震えるような感動に出会った時、そして、嬉しい時にも、人は泣くものです」

「では、関さんの今の涙は、そのどれなのですか？」

「さあ、どれなのでしょう……」

明彦は涙を拭きもせず、黙って月を見上げた。月の光に照らされて、紅葉がほんのり淡く色づい

ている。しんとした冷たさを底に忍ばせた秋の夜風がさあっと吹き抜けていくと、そこかしこから優しい葉擦れの音が、微かに聞こえてきた。やがて、ひとひらの楓の葉が、はらりと風に流れて、躊躇うようにそつと明彦の手の上に降りかかった。

秋の章・終